標註七部集

全

中村俊定文庫
文庫 18
984

標注七部集　全

標註七部集　上

冬の日
春の日
瓠
荒野

草稿

水鳥文庫

冬の日

ゐ之部目録

い 烏賊はえしすの國のくろこの　三丁ノ

は 蓮池より蛙のとびこむ夕まぐれ　五丁ノ

景樹文庫

冬の日

ゐ之部目録

い 烏賊はえしすの國のくろこの　三丁ノ

は 蓮池より蛙のとびこむ夕まぐれ　五丁ノ

に 二の尼より近江の老のさゝうきく　二丁ノ

日東の李白の坊より月をみて　三丁ノ

庭より本曾仏る京の夜長　八丁ノ

と 泥のくろより尾をひく鯉を捨ひ捨　九丁ノ

を おもふ壮年いまゝこゝろもを振ひ　四丁ノ

か 髪ふやすやすとたつよ方のくろ　二丁ノ

加茂川や胡麻の代参の徽を　七丁ノ

中村俊定文庫

た　きそやまのうすの山茶花　一丁メ
　　梅おそきそるる負佛の蕊　四丁メ
　　田中なるふるまんの柳落る雨　二丁メ
ち　地の雲のはるるもおなしく　六丁メ
つ　波くらるゝて月とあす露ふし　五丁メ
な　なつふのき山樓の片くら月　八丁メ
う　うきハきそちを減る三年　七丁メ
く　口をしと福をちきるちのうなき　四丁メ
　　雪かくれしき南京の地　八丁メ
け　元政の茶の花も砂めて　九丁メ
こ　元をぬきぬく臨済をまつ　五丁メ

て　朝鮮のほそうすきの白ひなき　二丁メ
あ　綾ひとく居湯の寺賀の花海て　四丁メ
　　雨こる法香の田螺ふうらて　四丁メ
　　縣ふるれ元法師と伴うれて　六丁メ
き　籾る林檎の方ハ竹言葉　仙そ　二丁メ
ゆ　雪の籾芸の國の色色ふき　六丁メ
み　箕の縣の奥をいくく　四丁メ
　　沛幸ふ延ふもふのみくすう　九丁メ
し　ちそ　宗祇の名をなしめ　二丁メ
　　秋水一平とうつそす　羽髪　三丁メ
　　公傳ふのく稍し柿の帶さ　五丁メ
　　白燕湯ふぬ水の　羽を洗ひ　七丁メ
ひ　大あくのぬ火達たきく人を見年　七丁メ

す　岸蓼のおのうつまく年玉のぶん

春の日

白氏新月録

ほ　ちゝきす西行たゝぶ奇遇も　十丁メ

か　性のゝ望てゆゝき森見ん　十丁メ

た　滝蓼ゝ寂初　よもてまると見ん　十一メ

ふ　文王のゝ初ふもちうて　十丁メ

古池や性見ひうもむの春　十一メ

こ　極てゝす元日里の暦うなな　十二メ

あ　新年おうゝ出新ゝ　十丁メ

初の初名ゝ　かゝる順　十一丁メ

し　昌陸ゝ松とハゝゝぬ時代の春　十一丁メ

せ　紹鷗ゝ栗ゝあゝて来ハなく　十一丁メ

す　すゝけ十ゝてゆく二ゝの衣川　十二丁メ

瓢

白氏新月録

か　江南の珠碩新ゝひさゝを遠ゝ　十三丁メ

ゝの月の大巡寺徊の次遊　十四丁メ

蓼の甲高ゝ性いるせん　十四丁メ

う　うす暮る日ハゝん水とおゝて　十四丁メ

ふ　古きゝゝのゝる蓮角

あ　武者傳ゝ遠て江湖をゝれゝ　十三丁メ

し　[illegible]のきす[illegible]の下まて　和ひなすり　十三丁メ

す　雀を[illegible]ふ[illegible]竜の[illegible]　十四丁メ
双六の目をのそくまてを[illegible]　十三丁メ

著聞集

名月録

い　[illegible]ふの[illegible]とうすらなる心のそこ　十五丁メ
[illegible]ゆるむ[illegible]見ふ[illegible]ふ[illegible]まて　十六丁メ
いちろうはをこたるろう　杜[illegible]　十九丁メ

いそうの野[illegible]分の[illegible]の[illegible]遠[illegible]　二十一丁メ
いけたる[illegible]ゆたなる名[illegible]人[illegible]　二十二丁メ

いろいろのろうをうの月の雲　二十九丁目
いきろう[illegible]の上の[illegible]枚つゝん　三十五丁メ
池の[illegible]　[illegible]名書[illegible]柳[illegible]　十八丁メ
一方を[illegible]さく[illegible]の[illegible]　二十八丁メ

は　ろうの[illegible]ろう名たろう賢[illegible]　十七丁メ
初夢の演名の橋の今の[illegible]　十七丁メ
ろう[illegible]ハいせの[illegible]一ろう[illegible]　十七丁メ
[illegible]ろう[illegible]たのまろう[illegible]隣[illegible]　二十六丁メ
蓮の香[illegible]ろ[illegible]ろう[illegible]　二十六丁メ
[illegible]ろう[illegible]ろう[illegible]　二十七丁メ
[illegible]ろう[illegible]ろう[illegible]　二十七丁メ
[illegible]たろう花[illegible]ろう[illegible]　二十八丁メ
花とち[illegible]ろう[illegible]の一[illegible]　三十九丁メ

ほ　ほろ[illegible]ろう[illegible]をたろう[illegible]　二十九丁メ
[illegible]の[illegible]親[illegible]ろう[illegible]　三十二丁メ
本[illegible]ろう[illegible]ろう[illegible]　三十四丁メ

[illegible] 三十四丁メ

と 武石の石塔ハ草の下 [illegible] 二十丁メ

[illegible] 二十二丁メ

[illegible] 三十六丁メ

ち 武[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible] 二十九丁メ

父母の[illegible]紙[illegible] 三十二丁メ

[illegible]仏と[illegible] 三十三丁メ

り 隆[illegible]八歳[illegible] 三十七丁メ

ぬ [illegible] 十九丁メ

[illegible] 二十四丁メ

[illegible]山の角 三十丁メ

[illegible]やな 三十二丁メ

[illegible]棚 三十四丁メ

[illegible] 三十三丁メ

か 槿の木のたなよかまハぬすのうな 十五丁メ

かさなる山只の山 十六丁メ

[illegible] 十七丁メ

[illegible] 二十七丁メ

[illegible] 二十九丁メ

[illegible]ハ[illegible]の山 三十一丁メ

[illegible]ハ[illegible]涅槃像 三十三丁メ

[illegible]の[illegible]て 三十四丁メ

[illegible]と 三十六丁メ

[illegible] 三十八丁メ

よ [illegible]の柳 二十八丁メ

[illegible]月の[illegible] 三十二丁メ

た 雷雲の稲妻 [illegible] 二十一丁メ

[illegible]より [illegible] 二十一丁メ

[illegible]の [illegible] 二十三丁メ

七夕よ　あのすこうもたきもの　二十九丁メ

れ　澤菴の墓をワかの秋の雨　三十一丁メ

連翹や　さ詩ロとろうかろう　三十四丁メ

つ　つきのうて　れく　ほう　毎のうち　二十一丁メ

瓜畑も　稼のすのうち　こうもり　二十三丁メ

月のおろうち　井の　月　三十七丁メ

月り　柄をさ　あるもよき　風ち　三十七丁メ

ね　桑ハなはもの　引きせよ　おの下　二十四丁メ

な　行のの月　仏　ろの月　十六丁メ

たうもう　ろ　の一川ち　十九丁メ

ろ　ぬ　ぬ　野　二十丁メ

呼　の　ひ　たき　二十九丁メ

行　ち　あ　是　名利の地　三十八丁メ

む　む　詩　あ　き　嗅　績の　三十九丁メ

う　ろ　ち　ち　ち　ち　ち　十四丁メ

ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　十八丁メ

ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　二十三丁メ

ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　二十六丁メ

歌　あ　世　猫　吉　猫　首　ち　ち　ち　ち　二十八丁メ

宣　悼　の　融　魂　の　ち　ち　ち　ち　ち　三十九丁メ

く　くさ　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　十九丁メ

背　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　二十二丁メ

ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　二十三丁メ

や　山　畑　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　三十二丁メ

ま　行　ち　ち　伊　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　十六丁メ

舞姫の[illegible]指を折るとて　二十四丁メ
饅頭をくれさせ給ひ　三十九丁メ

(け)
下の下の客といとおかしの宿　十七丁メ
ふのゆついてに淡ふほとけ達　二十三丁メ

(ふ)
二ゆもめをとをとなる花のあと　十六丁メ
佛名の夜に腰懸し白髪の郎　二十七丁メ

(こ)
氷ゐ　涼み所　こうふる事の風　二十六丁メ
こうふ　もとを　鳥　小雪　二十六丁メ
こうふ　の為等　やあるゆゆしと　三十二丁メ

(え)
持たるうちうちより　みの留涼かな　二十八丁メ

(て)
月をつゆて奇やある　雉うなる十八丁メ
天ちてあるれあまく　色の著　三十一丁メ

(あ)
あるうちのうちの[illegible]　二十一丁メ
秋の雨うれて瓜よ　ぬんもなし　二十六丁メ
あるあるとうとうとうとうとうの宿　三十一丁メ
秋風より女車の[illegible]をとこ　三十六丁メ
あるとうとう　七種の秋　三十九丁メ

(さ)
さわ姫はふらいの面いのなるむ　十七丁メ
さとし　ちの色をうとかつこるる十九丁メ
さとし破蓮六やうき　石ぼ色　きし二十一丁メ
さけ　妹ら頃秋をあるうり　三十二丁メ

(き)
さうとうとうは正本をうり　涼ふうん　四十丁メ
秦ものとうはすいうの涼四十丁メ

(ゆ)
雪のゆは毎とのかゆの色　十六丁メ
夕うるは秋ハい後　のふるゆ　二十丁メ
秋来も如ら月のゆるのゆるの　二十四丁メ
ゆの旅ものうてハかゆ　秋の著　二十九丁メ

(み)

[illegible]　三十丁メ
[illegible]　三十八丁メ
[illegible]　二十五丁メ

(し)

白菜や[illegible]　二十六丁メ
[illegible]の[illegible]　三十丁メ
野宮八[illegible]　三十一丁メ
[illegible]　三十五丁メ

(ひ)

[illegible]　十五丁メ
姫[illegible]　十五丁メ
[illegible]　十八丁メ
[illegible]　二十一丁メ
[illegible]　二十六丁メ
[illegible]　三十七丁メ
[illegible]　三十八丁メ

(も)

[illegible]　十九丁メ
[illegible]　二十丁メ
[illegible]　二十七丁メ
[illegible]　三十六丁メ

(せ)

小柑子[illegible]　十七丁メ
[illegible]　三十丁メ
[illegible]　三十四丁メ
西王母　東方朔　三十五丁メ

(す)

[illegible]　二十丁メ
[illegible]　三十丁メ

冬之日標註

隨齋成美校正

狂句このもとの成ハ竹なるよ秋なれ

竹齋物語　天和三年刊行

日影ゆるして清水の宿家なやよつきまきり扣
少さき町よ宿をもり肴板をきりかれ
又折ふし冬のあなかを破紙子よ布ふるつけ
常ハ木綿の九くけよ羽折ハ紙のもすひるる
紫紬の為りをちこのけ為のんなをきなりる

[illegible]神田の臺うんとちりてあるを

踏ム

[illegible]の[illegible]なる法[illegible]あしめふやふきまて

[illegible]

今竹高物語ト云草紙アリ作者不詳

竹齋者業醫養狂歌住尾州名古屋後住江戸

神田寛文年間人

[illegible]

八雲抄巻三霞の條下ニ

[illegible]と云り古人説ナリ

枕草紙

あの涼しかるへきぬと人のあるむこつけてそうら

あけらいとをの[illegible]

朝鮮

朝鮮のほそうすきまの白ひちまし

朝鮮ハ芒の一種の名也

髮

[illegible]

東齊隨筆

二条ノ后イマタ内ヘ参リ玉ハサル時業平中將ノヒ

くニ通ヒ侍リアル時后ヨイテカクシ奉ラントセシヲ

セウト達ウハヒカヘシテ中將ノ髻ヲキリケリ中將髮

ハヤサンホト迚哥枕センタメニ関東ニ下向ス

…田の臺うんこそはしてもちぬること

…るは付はあしめ小ハやふくすしまて

…を中

…云草紙アリ　作者不詳

善ニ狂歌ヲ佳ニ尾州名古屋後ニ江戸在

…人

…のきくの山茶花

散ノ條下ニ

…しるとこり古人ノ説ナリ

経竹翁に似るといふに對して山茶花(サザンカ)の
とこるをかハ諸艶やと同じる之ハ八雲御抄ニ
たてまはやさしきと設置古人の説なりとおせられて
たしるそはる同語にてたゝいひ出しいひたる義語なる
唯けるといふよう語勢つよし
萬葉集にもあの上にあふれたるし
又實能卿にもあふれ多しるなきの篠原なまと
形容おもふへし

…ぬと人のあをむまつけてこりう

…のし

…すきの色ひたまし

…槿の名也

…ちのふ所のそと

…ト

…ノ内ヘマ井リ玉ハサル時業平中將シノヒ

…ル時后ヲイテカクシ奉ラントセシヲ

…カヘシテ中將ノ髻(モトドリ)ヲキリケリ中將髪

…哥枕センタメニ關東ニ下向ス

田中なる小まんら柳落こと

近世伊勢山田ノ遨遊巣ト云処ニ小マントト云女アリテ
辞世ノ哥ヲノコレテ身ヲ投タル事アリ其処ニアル
柳ヲ小マン柳ト呼レナリ

二の尼ヶ近衛のまのさくらきく

二ノ尼ハ二臈ノ尼ナリ　西行桜ノ謡曲ニ近衛殿ノカハ
櫻トアリ

宗祇の名を付ル

美濃国　郡山田庄宮瀬川ノ遨宗祇水アリ相傳
東野別ヲ送リテ哥ヲ詠セシ処ナリト或ハ白雲水
トモ云コレハ宗祇ヲ白雲齊ト云シニヨルトカ
宗祇紀別ノ人姓飯尾氏以風月為生涯文亀二年
七月卒逆旅年八十二

烏賊ハえもすの國のくらこのく

史記龜策傳
諺夷氏羌蜼無君臣ノ序亦有決疑之下或
以金石或以草木

秋ふ井一斗とつくる夜雪

飲中八仙哥
李白一斗詩百篇

日東の李白の坊より月を尋て

素堂家集

石川丈山ノ詩仙堂ヲ尋テ六言六句ヲ吐

先尋日東李杜静對中華仙顔山鳥啼長松樹

野客入老梅開詩興猶何処好泉前翠微間

朝鮮学士丈山翁ヲ日東ノ李杜ト称美シケルヨリ

起句ニシカ云

揚升庵日本李白慕謝安東山故自号東山

李白杜子美云汝与東山李白好云々

鼻

鼻乃奥を付て考

同文通考国字部ニ鼻コノ訓鼻ナリ

綾

綾ゝ居湯より志賀の花瀬

保元平治物語為朝流罪ノ條ニ

有漏ノ身ナレハヤミ出シテ灸治下多クシテ温濕大

切ノ間古キ湯屋ヲカリテツヲ子ニ居リ湯ソシケル

居湯ハ俗湯桶ノ小ナルヲ云

あるゝ 壮年

いるゝ

杜子美集 曲江對酒

更情更覺滄別遠老大徒悲未拂衣

桃園の中に桃園あり貞徳の翁

貞徳五園ノ中ニ桃園アリ

雨こめて沈香の田懸ろ忘て

和名鈔

陸奥安積　安積和名アサカ

口をしと福をたちたちなきて

和名鈔

附贅　荘子云附贅懸疣贅音制俗云布須倍

篠ふの積と梯の蔕まし

和名鈔

尒雅云東之李之類比有寔都計反和名保曽

今案寔蔕相通

蓮池に沈るまるとまるまる

文選　謝靈運

魚戯新荷動鳥散餘花落

高せもきめく臨淵もまし

江湖風月集　大義渡

濯足機先被熱腦黄金之義鐵肝心十成報德

酬恩白萬古一江風月寒註云或云黄碎軍運

禪師得道後忽思葛侍父母師往到閩中一婆

子出問何処来師曰江西婆云我家亦有一子在

江西多年不帰師因借宿婆親為洗足運慈心

一誌甚大婆失記是其子次日運辞去於三里外

説与郷人云吾母不識山僧但母子一見足矣郷人

報知其母乙趕至福清渡運已発母一跌而終

浦ゑのつて月とともあすす霧かな

和名鈔

孫愐曰霧音終漢語抄云之久礼

馬糞掻あふきたてる風のおとこそ

京近邊ニテハ扇の形シタル板ヲ合セテ馬糞ヲカクナリ

其板ヲ俗ニアフキト云

縣ふるを鳥見ぬ命と作うわて

日向国ハ何治命といふる富民あって其住世ヲ乞く

斗のもの見ぬ坐めより渠と字して毛尺治命ト云リ

雪の狂ふの國の笠ぬつらしき

白氏文集

釜童吳天雪

坐の雪の日を霜も初なく

山家集

ねのもとをもの下にすてるもちをんなをのきさく
らきの幸月のこゝろ

山戸幸のおのゝつまこを思つるもの

万葉集巻十一
寄物陳思

難波人葦火燎屋之酢手雖有已妻許増常
目顔次吉
又拾遺集三
後波人　アシヒタクヤハスヽケクトオノカ妻コソ

トコメヅラナレ

加茂川や胡麻の代をうゝ微

上加茂ノオクニ稲荷ノ禾倉アリ其氏子胡麻ヲ植ル
カノ宮ヨリ種ヲ神オロシテ植レハ枯ルヿナシヤカテ
出来タル胡麻ヲ納ル也俗是ヲ胡麻ヶ代祭ト云

うきもちをを敷る　三平（マルガホ）

山谷集

餐茶汁飯飽則休補被遮寒則休三平二滿
過（過）則休石貪不妒老則休

火あるのゝ火達ちき人を見平

無名抄

火モオカヌ　夜のすがらつのくにすみよしの浦

人モスサメ

白燕湯ゝ水を汲し

三代實録貞観八年六月廿日丁亥丹波國

獻白燕

易占曰山見白燕其君宜得貴女

西京雜記元后在家嘗有白燕銜白石大如

指墜后績筐中后取石自剖為二中有文曰

毋天地后乃合之遂還乃宝録焉

遊仙窟

白燕飛来白玉釵

雪かゝ川　き　ち　東の地

東鑑

建暦三年四月廿日旅南京十五大寺供養

砂石集

中古東大寺ニ何者カシタリケン立札ニ

東大寺寂大一ノ寺ナレヤ

立札ニは之

南京ハ北ト云ヘリ

庭前木曾仙人掌

続日本記

大宝二年十二月辛寅始開美濃国木曾山道

なつのやま山橘ちらほら見ん

古今集宋雅註山橘世俗ヤフカフシト云

實赤し髪置時山菅ニ似草ナリ

和漢三才圖會曰巖壑石間有之高不盈尺葉似茶

葉而色淺苣紫色花實似仙靈木而只三顆　攢生

深赤色

大和本草訓平地木爲耶麻多知波奈説其形

狀亦今云叢柑子也

泥のうへ尾をひく鯉を拾ひけり

泥中曳尾荘子ニ見ユ

清幸の御幸なりけり

続日本紀養老元年詔曰朕今年九月到

美濃國不破行宮留連數日因覧當耆郡

多度山美泉自盥于面皮膚如滑亦洗痛所

無不除愈

元政の号の祈り

続隠逸傳

日政字元政自号妙子或号不可思議又号泰堂

姓菅原氏 石井洛陽産天資聰敏氣質慈心
順少時好学壮歳致仕矢志佛業落髪為僧入
深草山創瑞光寺甘閑居焉一室蕭然堅典之
外無餘長矣宗俗称石井平之亟元政仕彦根
城主伊井氏三十六才羅漢為僧四十六才寂

春之日標註

隨齋成美校正

文王のゑ

孟子
文王囿方七十里芻蕘者行雉兎者往

熊熊おりる出家

後拾遺 隆弁
神代より老ラトメテ朝熊ヤカミノ宮ニスム
月カケ

嘉陽門院越前

神サヒテアハレイク世ニナリヌラン浪ニナレタル朝
クマノ宮

慕京集

嵐ふく峯の松風春のくれてもよりはるる海の夕
西行家集

西行なくふかの可讃也

伊勢内宮ニテ

ゆふたすき掛をせるやうにみゆる山田の原の杉むら立
桂のこゆてゆゝしき森にもあるかな

ユヽシキハ忌ヽシキセソレヲモトニテヨキコトノ甚シキ

ニモ博ニ用フ

秋の和名抄　順

源朝臣順従五位上能登守撰和名類聚鈔二十巻

詠そもし四のうのうちハ唐海ヨリ

夫木

明アくる四の云ふ家者嶋ておちくる人の数ひ尽くる

東関記行

アル人ノ日蝉丸ハ延喜第四ノ子ニオハシケル故ニ関ノ
アタリヲ四ノ宮カハラト云トイヘリ

紹鷗ノ霸ハ有て来れなく

紹鷗住泉州堺ノ字中村ノ邑

滝無ーー　宗　宗如ーー　ますきて　きくん

井陸鈔

後嵯峨院ノ御時土田泉ニテ内連歌アリケル女房弁
内侍少将内侍召レテ簾中ニ侍リ民部卿入道女房ノ
中スヱテ簾ノキハニ袖侍セラレケル耳オホロニテ滝ノヒビキニ
マギレアヒテ聞ワカレサリケルホトニ為教少将山ヨリ宋ヨ折テ滝ノ
落ル処ニフタギテ侍リケレハ水音聞エスナリニケリ
内連哥ニテ侍リケルヨシ弁内侍日記書テハヘリ

昌陸ノ松ヲ見ル時代の事

昌陸ハ将軍家ノ連歌ノ宗匠ヨリ恒例正月十日
御會百台員ノ巻頭ヲ奉ル其句毎年松ヲ用フ

極てうす元日里の朝ぼらけ
列子
宋田夫曝冒負日之暄以歛吾君必有賞者

古池や蛙とびこむ水のおと

筑波問答序

ちはやふる春の来ぬれば古池の乱草をたれかかりけん
陸奥ノ国ニ春ノ来ルトテ乱草ヲ刈ケルニ
折ふしめて声ヒヒ鳴かれの水の西ハ西部の
鶯次もきくなり一つ屋

すかきやゝ為て西く京の衣川

篠掛修験者服俗謂袈裟為篠掛誤矣

老子冊曰知足之足常足

老子天下有道章

瓠標註

隨齋成美校正

江南の珎碩家りしことを送れすこれハ是ハ瓠をもて酒を盛りたるものなるあらん

莊子

惠子謂莊子曰魏王貽我大瓠之種樹之成而實大五石以盛水漿其堅不能自舉也

或曰大樽に造りて江湖をわたるべくなるも異なり

又曰

今子有五石之瓠何不慮以為大樽而浮乎江湖

双六の目をのそくまて　きのこの事

枕草子

きよけなるものの雙六をひとひうちてなねあうぬ
るやうにきとうたんすに火をあのうけてうきのさいを
こひもちてとうもしれぬん

志ふのさす　海のかまて　初なり

万葉三　人麿

飼飯海乃庭好有之苅薦乃乱出所見海人釣船
同十一

庭浄奥方撈出海舟乃執梶間無恋為鴨

元文年間冷泉為久卿菜名ろて

紀日さす　くに那の海のたんよく　海のんなのてわろく
　　宝海上和平如庭今も菜名四の方佐ふ自と

古きそくちのつくる　海会

古今著聞集

高名の事たちにてかけてきへてまけたくち八十よ
人目をして

こうぶりの大罷寺縄を吹通し

大聞寺縄子勢州関と亀山の間とある　土佐タイコジと
清音ヤとなる

亀の甲高くうつる　鳥も見る

根本律

有二鷲共一鼈為其親友遇天大旱池水皆空鷲
欲東西語鼈曰如在　我何所依可
相将往去鷲曰汝銜一牧枝口咬共去他国空中飛

過人或見曰空中二鵞共銜一牛糞共斤飛鷺曰秋
不是牛糞岡口便墜佛言如人口過
宇津保物語なて宮
うせ雲のあなたくろくあのかのふのうしみいのなるちうしとつたは
古今六帖
古河のそこのこひちりあちときくかめのこふるたるせてふる
雀を　ちのふ　鼈のちく　ふくき
ヂ、メキハ鷹の鉗の小鳥を今竹竜の名也
うす雲る日ハ　ゆきんみを　ふれあり　ゆくく
言塵抄
霜ふれハ　ふれ　ふれの折るせ　ふれあんとも云
薬奥羽左の俚諺る雨ふるへき　天気を　ふれあんと
ふ霜の大なるあけた必ふるの日ニ雨ふるこをふれあんと云里

荒野集標註

隨齋成美校正

尾陽蓬左樞木堂主人
俗傳謂熱田宮爲蓬莱宮蓬左ハ蓬莱の左ニて
即荷兮ヶ住る地をさす
ふるいふるいとのすりなるこんみたりのみのなるくるみ
ふるるて
朗詠集
高くたかくそのこしものとけくて　なるのなるこうこ　ふるふふ
姫ゆりのなるもつすくそ　蓬の大空ニたちかくて
山家集
雲居ふつあ雪ひるあるひをゆ　ゆるつくそもなきんか

下こみ下の客といふもの宿

上六条中くちの下に海の二口海八下の下の客

山嵩宗鑑

櫃の木のえだおほまるめすのくすの邪

和名鈔
櫃唐韵云音匱和名加之　萬葉也余雅集註曰
一名杜一名檍

きくあすあきの月を
みくらるとそ
かすかくいふくれ人のなほくきす

千載集夏
暁聞郭公

後徳大寺九大臣

なくなるをなほ名在明月のこゑ

何ものの見てもの物三月

本朝文粋
織月賦　菅三品

遊魚疑沈鉤於碧浪旅雁驚虚弓於紫烟

同

漸桃簾惟有玉鉤之可望觀夫飛鶏猶慚端牛
何在躁於破鏡之姿寧見如珪之彩

雪のロや船とものの明のこ

謡曲自然居士の詞

船底反のお船の色さそ出てんへ

ながこのもの雪こ海のこ取まて

尾張本町書林風月堂孫兵衛蔵
印
書林風月ときしるの名ゐをしくあほえて

[illegible]

いさ山も雪見るまでは　[illegible]

丁卯臘月初

夕道行のつゝみを送る

かさゝぎのわたすのあるか山　京　かも生

加生後更名凡兆

二日もぬるゝはきをなれの花

家集

[illegible]

[illegible]

たゝのさゝ伊勢の家の買人を誰

古今集　伊勢

[illegible]

之新わのとなたかと迷はくら

山家集

[illegible]

小柑子西土ゝ[illegible]

伊勢物語

[illegible]

[illegible]

[illegible]

三代実録

仁和二年正月十九日己酉大宰府例貢小柑子以

十月三十日己前為貢進之期

さゝ姫ゝ[illegible]ゝいの面いの[illegible]

ふゝいい猿楽ゝ月る女の面形ゝ

[illegible]

紙子
切ハ能ク付ク紙ヲ細ク
さらしもの

和名鈔
唐韵云塹音堅漢語抄云加豆乎或文用堅
案下字集気形門塹字カツラウラト仮字有堅
蓋字之誤

初夢や濱名の橋のなごり
陽成院元慶八年作濱名橋今断絶
拾遺　兼盛
汐みてるほとりゆきのふ旅人や濱名の橋をなつけそめけん
三代實録
元慶八年九月戊朔遠江国濱名橋長五十六丈廣一丈
三尺高一丈六尺貞觀四年修造歴二十余年既以破壊
勅給彼国正税稲一万二千六百三十束改作焉
そるこの雨のそいせもなかるこのかこよやすらん
誹諧家譜

望一杉田白常伊勢山田人也遠慕守武之俳風雖異世同
道如師弟先後受貞徳翁之添削　家書曰猶吟千句
同後千句　寛永七庚午年六月二日没年八十三

蘭亭の主人池に鵝を飼ふ
ゆくすゑ筆をみるかな

池に鵝を飼ふ　俳名書曰柳陰
晉書
王羲之字逸少與内志宴集於會稽山陰之蘭亭
自為序
又曰山陰道士養好鵝羲之往觀甚悦為寫道德
経畢籠鵞而帰
とくしの白合哉
何とかく俳名をなつる柳かな

うごくとも見えで畑うつ男かな

其袋集

畑うつをとこかと見て

手鍬つかふて竹中ある晴の春

古今序

花になく鶯水にすむ蛙の声をきけばいきとしいけるものいづれか歌をよまざりける

肖柏老人のかなしみ山といふ香を

くるのえなをもけるに文鱗らくれらるとて古の越人の

枯きゝるを忘れがたく〔?〕葉の比文鱗にゆづり

紅子焼ももあるしころもへ

隠逸傳

牡丹花者具平親王遠孫也早出家俗名以肖柏

又自称牡丹花人皆随呼之喜讀書詠和歌兼善連

歌従自然斎宗祇学焉性好酒愛香併花為三愛

なつ来てもたゞひとつ葉の一葉かな

石葦 和名以波乃加波 俗称比止津波

本草綱目

石韋叢生山谷石旁陰處其葉長者近尺潤寸余

葉厚如皮背有黄毛凌冬不凋

和漢三才圖會

石葦丹波伊豫處々有之其葉背了葉勒深緑色面

有微黄粉如毛背浅白色如有白毛也不黄毛

いちはつをとこけるらん杜若

紫羅傘 俗云伊知波津

さびしさの色は覚えずかつこ鳥

寂蓮

さびしさはその色としもなかりけり槙たつ山の秋の夕ぐれ

くるまもとゞめて人よりあはせ
くるまもとゞめて人よりあはせ　和泉式部
藻のもぬぎの袖のゆきるる　の歌
伊勢物語
ちくつのおもてをさたとゝふ屋もとゝのゝえるゝまゝ
たゝしゝ　未詳
或説ちうし八三四ゝて移を
一言法談
なむ不審のゝ出来る写一期の不審ちゝゝたてん静
名仏すゝるもなし
魚ちゝゝるゝるに
古今著聞集
ゝる物まゝゝゝる猫を
源平盛衰記
ちすゝうゝ身のあなたに結ぶをちゝゝる
ものもなれん
すひつさくさゝゝ
無名抄
長五語て云述懐のゝ
火おこしあゝのすひつのんちして人もさゝすゝ
枕草紙
すゝきゝ物火おこしすひつ
夏の夜伝
中十
夕ゝゝ　枕ゝい物ゝの栗すれ
古今集
ゝなるひつ草と結ゝ枕い物ゝのもる
ゝゝゝゝ　枕ともやらぬ木陰かな
玉海集

東山慈照寺の又（さま）祇園の法師平仲の桜木の花を
やまゝして詠ず　友人を伴ひ来る紙巴法師
まるえて志ゐ（しゐ）て通りるふゆうけ侍る
海さま桜もろく

見るの石池や草の下清み

和名鈔
本草云龍子一名守宮和名度加介蘇敬曰常在
屋壁之中故以名守宮也在壁曰蜓蜒在草曰蜥蜴

宗祇法師のこと葉にとりて

名もたゝぬ小草も咲ぬ草のなか
名もたゝぬ小草もなくて垣根かな　宗祇

紅葉ゝはたのもゝ（ゝ）河の間

白氏文集題仙遊寺
林間煖酒燒紅葉石上題詩拂綠苔

一本の草の根清し井堰又堰埭

さそ花孫六やゝきく花の数

姓志津名兼氏俗称孫六名兼元皆美濃国鍛工

いそのかゝ仙人掌の面の赤遠星

和名鈔
兼名苑註云流星一名奔星和名与波比保之

あめつちのもれゝゝ俳諧百題のこと書ゝ時雨ふ

風声ハ天地の語なり　ゝとあるをトアリ

出所未考

河圖云風者天地之使也

峠より宮舟まで五里

沈存中筆談

信安滄景之間冬月作小坐床氷上曳之謂之凌床

つきのへて松くらはる宮舟のそも孤ふ

山家集

たやすくてをのをつけなるつるのなかなる白雪

供屠蘇白散

いそがなくもとなる人はなし

温故日録引歳花記云

屠蘇酒昔人展草庵除夕置里人樂令盞裏置井中

元日取水置酒樽名屠蘇飲之不疫

年中行事哥合

櫻子はをきなき童女をそ作り

そこそこそこ多くの花の後の世のえつるこきこうたえとう

春日祭

春日祭二月上申日

先未の日近衛中少將勅使より富貴内侍所

石清水臨時祭

皆立寄のこつより

公事根源

臨時祭三月中午日申辰日試樂舞人竹基のもとより行
枝をかつらるゝ所に仁寿殿のもとより清涼殿のまへ
陪従を陽の方人数子うゝひ音楽を合なとまるとゝのや
南日ゝ大臣以下かさしの花を便舞人の冠に付三献の
立秋の後の初の丑の日土公のまつり是ハ平将門の乱のとき
八幡こいのゝを給ふ報賽のこゝろを行ひ初らるゝ
代中草紙
八幡臨時祭ハ矢ノ朱雀院御時被始行也件哥八貫之
奉之
松もあひまもしけむすいそ水打ちあるとゝはまつぶむ

灌佛

たふのはつて清涼殿
兼和七年四月八日請律師傳灯大法師位静安於清
涼殿始行灌佛
施米

うちはてゝ石とこすゝ米て虫臭き
増山井
施米ハ東山西山北山なとの山寺のたゝきなき法師
たゝ米茶湯を賜やけもの所とこそ
駒迎

瓜髪し旅のすゝやこ海むく
公事根源

天皇南殿ニ　出御ありて馬を供奉上御御馬
解文を奏す次事はて公卿以下次第に御馬を引る

撰虫

第の御ふみ虫のをれるきりすと

公事根源

殿上の道遥して殿上人をあまたして嵯峨野なとへ
むかひて虫を籠さうらひ堀川の院の御時より
始る年中行事哥合
いろ〳〵のさう蟲〻虫を喜人の元すこれもきてそるなる

十月更衣

更きの衣うへよりとすへきもの

公事根源

掃部寮夏の御畳を撤して冬のに改ふ
年中行事哥合
あらたまりて冬ものふぬ衣をきるをあらためかへる

五節

舞姫をうらうらひ指を打すり

公事根源

五節舞は五人也常寧殿にて天子御覧あらせ
給ふ時は五人なる時は直
衣指をめして供奉をめる天子の御直衣を指をあ
するは時の外になし供奉するあり

追儺

大きなる御目をつくる鬼の面

通要為　張籍

偽形逢著款冬華出吉
吟り之斜十二御中春
雪過馬蹄之去入詩家
增註款冬華　古今方用為治
嗽之最

年中行事哥合註ニ
儺ハ疫をおひてふせぐ歟のやうなれどいまゝのれまて
周礼礼記論語するものせうそんせうのち世の礼儀は志に
ゑるこゝろとゝのひ一強まる文辺るの熱う張衡の東京賦
詳なり
又後漢志第五の迎のらをやらふそうむこ儺の一字
をもおにやらひとよむなり伊氏行なやらくそあり
史木　宣旨
九重の宮のうへやらふなのあてにもなふみ埋みる
今日不知誰計會
春風春水一時來
氷ゐ　深ゐ　冷ゐ　さゝなる　春の風
白氏文集五十八
府西池

柳無氣力枝失勢池有沒文氷尽閑今日ここゝ
白片落梅浮洞水
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
白氏文集十八
春至
若為南國春還至爭向東樓日又長白片ここゝ
春來無伴閑遊少
花　花　花　花　花　花　花　花　花　花　花　花　花　花　花　花
白氏文集十三
曲江懷元九
春來ゝゝゝ行樂三分減二分
花下忘歸因翫景

森入なはものりきせよとの下

白氏文集
酬哥舒大見贈
去歳歡遊何処去曲江西岸杏園東花下ここ
留春春不留春歸人寂寞
打妻もこゝ後えの日の跡なれ

白氏文集五十一
落花
留春ここ以下有八句略之
池晩蓮芳謝
蓮のまもりもるまもるまも

白氏文集 五十五
池窓
池邊〻〻
按邊恐晩之誤
大底四時心惣苦就中斷腸是秋天
夜の秋を秋らてハなく秋の雨

文集十四
首春立
黄昏独立佛堂前滿地槐花滿樹蟬大抵ここ
夜来風雨後秋氣颯然新
秋の雨ちれて月よ秋人もな

文集六十七
雨後秋涼

夜来風雨〻〻〻團扇先辭手生衣不着身

遲〻鐘漏初夜長耿〻星河欲曙天

長恨哥

万物秋霜能懷色

白草紅葉映黛綠

文集十五

歲晚旅望

青江南天氣好可憐冬景似春豪

文集二十

寂寞深村夜殘雪中聞

文集六

南窓背燈坐風霰紛〻寂寞〻〻〻

佛名の礼は懺悔〻〻自撃ちて

文集二十五

敬贈礼経差僧

李夫人

魂在何許香煙引到焚處

文集四

李夫人

九花帳深夜悄〻反魂香一反夫人之魂夫人之魂在何許〻〻

十洲記云

聚窟洲在西海中由來地上有大樹与楓木相似葉葉
香聞數百里名力反魂樹死屍在地聞氣仍活

楊貴妃

雲髩半偏新睡覺花冠不整下堂
遲春寒賜浴華清池溫泉水滑洗凝脂
長恨哥

昭陽人

小頭鞋履窄衣裳青黛點眉々細
長外人不見々應笑天
文集ニ
上陽白髮人七言
紅顏暗老白髮新ニシテ

西施

宮中拾得娥眉斧不獻吾君是愛君

錦繡段

范蠡

一戰功成早制身釣竿斡動五湖雲宮中ニシテ

呂仲見

王照君

王貌風沙滕畫圖
文集十四
錦繡段
明妃曲　僧李潭

玉貌〻〻毘藍爲舊恩疎

里虫

枝なきもうりは蜀漆の花

和名鈔
新抄本草云蜀漆和名久伊岐良末宇豆岐乃恒山也
牛馬四足是謂天落馬首穿牛鼻是
謂人

一方や梅さく枝の縱横

莊子秋水篇
落ら絡通
藏舟於壑藏山於澤謂之固然
而夜半有力者負之而走

からなのら師走の市よりうるさくん

莊子大宗師篇固下有矣字
絶聖棄知大盜乃止

七夕よ物のすきともなきものし

莊子胠篋篇
鋭者矢

義なくて泳なきものを火ひ

古硯銘 唐子西

藤房

ほとゝきす鳴やむはなを春をとり

藤房者万里小路宣房男正二位中納言建武元年
十月出家州九才

一休

いかゝくのうちをのがれぬ月の雲

一休禪師名宗純應永元年正月元日生天性豪放
絶繩墨世傳虛堂後身也文明十三年十月廿一日
化八十八平日所述頌偈輯名狂雲集

法然

明月のつゝみかねたるうらみかな

釈書源空兼安四年出黒谷居洛東吉水盛説專修
念佛及四頓菩薩大戒
行狀記諱源空法然漆氏作州久米郡稲岡人其先
源氏仁明帝之裔父時國母秦氏嘗夢感無嗣祈于
佛神一夕夢吞剃髮刀有身崇德天皇長承二年
癸丑四月七日誕建暦三年正月廿五日頭北面西
誦光明遍照偈怡然而寂壽八十偈鶴六十八

山岩

たくやまをあるかるゝ山石のゝ用
枚乘書泰山之霤穿石彈極之綆斷軒水非石之鑽
索非木之鋸漸靡便之然也

志らぬ世の岩山 式アの大江山

金葉集雜
和泉式部 保昌に具して丹後国に侍る比都に哥合の
あるを小式部の内侍哥よみとられて侍るを中納言
定頼屋のうへに侍るとてきて哥はいかゝせさせ給ふ丹後へ
人つかはしたりやいかゝなんもとなくおもふらん
といひたるをうちとゝめて詠る
大江山いくのゝ道の遠けれはまだふみもみぬあまの橋立

菜一把りすてもるなのはるかな

阿波手森 尾張
走木

はたなぐたちもさそひなてのもりてもるる

高殘る鬼嶽さむき冰柱の柱

小根嶽 丹波
俚俗称鬼嶽

関さえて富士高しさくら

万葉九
大宝元年辛巳冬十月太上天皇大行天皇幸紀伊國
時歌十三首
藤白之三坂手越跡白栲之我衣手者所沾香裳

富士の月富士あるくらふの月もろよ

さくらの白合の
ふこあるのちみ月見せむとて

鶯宿の菅笠のあるよむまくらな

菅津尾張
東開記行

旅店工人ちつまりぬ草の枕をあて菅笠宿るうぬ

狩野橋に鹿をあつまる秋の山

狩野橋八鷹狩の時平用る器たち今掛まそ
形をすねひて制作る刻竜やらのまちんぬ

澤菴の墓をつのれの秋の蔭

澤菴名宗彭但馬人三浦介平義明末葉秋庭綱典子
初師大徳寺春屋後師一凍紹滴正保二年乙酉十二月

十一日入寂墓在品川東海寺

其角より

あらあらし吉野の山の桜哉

あたたかなるふとしらるる春の日

天龍てらこのあるあまの人丸の書

西行法師繪詞

東のかたへ行とて富士の国天龍のつらにはきて

舟に乗るに小夫の歌をもちてうつるとて

かりらめをてをしなてうつるとて

ゆくえもみえてをしなく西行うらうらしてられ

十六夜日記

天龍のわたりといふ舟の昔もかひなきわたりにこそ侍

父母のおきてを忘れ給ふの歌

玉葉集

山ぶきはほろほろとなくかきけぬ人をとをふ母うとそ思ふ

こかくしの歌

世說

范宣年八歲後園桃菜誤傷指人問痛邪答曰非為痛身體髮膚不敢毀傷是以啼耳

蔡邕

和名鈔

唐令曰奴婢名豆布祢人之下也

撰集抄

後とは智者の德をかくしてゆかねとふれるやらん

楫の次り新子見さすに俺ぬ
京道の俗談に一食に三人を[illegible]せさ[illegible]ぬるを
見さんと又あとさすらとゝ
ちけめし妹か恒ぬ[illegible]
むらんて妹のかきの[illegible]あれ[illegible]つてるまの草のゝて

六宮粉黛の美顔色
宵寒の稲妻清すゝ月の影

長恨歌

山畑てものゝ[illegible]
奥山の岩のたゝ[illegible]て人ゝ[illegible]あ[illegible]や　西行

未期の

義るもを南世の孫陀仏とゆ[illegible]

其角雑談集

神職の辞世として伊勢山田のひをたゝむへきやゝ[illegible]
と歎美して打驚くる所を
拙俳諧語録に　辞世　守武
[illegible]ものゝ[illegible]神路山峯の松風　峯の松風

家記云
文明六年九月廿日叙爵同十九年二月廿日任従五位天文
十年四月廿三日轉二位號園田長官同八月八日卒

辞世

我のゝ[illegible]ん我せるぬ

たゝなはり　たゝの里人うれあるのも

万葉集巻五

憶男子名古日歌三首

長一首

短二首

反哥

和可家礼婆道行之良士未比婆世武之多敷乃便於比乎登

保良世

神塩山　おもひもすけぬ涅槃像

金葉集

神塩のあらとゝゆたすきおもひもすけぬるの哉

連歌　ゆ　こち望　日ほとゝぎすれたり

山家集

ねのくらいたものもとたて去ゝたもうの如のもち月のこゝ

木履たく僧もみたり　雨の花

枕草子

ゆかしなとたまりて一日なとすゝをとこたちの

もとす車ひきよきて立るゝ弟たちゝる門住師

たちの足駄とりつものをはきていさゝかはしりもなく

ありのゐるとて何もしなく雨のたゝうちまみ

女房の袴ゆ所と男人て出て簾うれたく

暗きに女房御所ゝ所ゝもりて

たのひあてに白鼻かむ色のきれた

ほろ〳〵と　落るあるひのも

法華提婆達多品

[illegible]門[illegible]く施餓鬼棚

[illegible]

千觀の馬しかせ[illegible]

隱逸傳

千觀世姓橘氏相州刺史敏貞之子初三井学顕密教後
逃衆住摂之解近山而時出淀渡口自爲馬丈恵行人

[illegible]と梅[illegible]

初名鈔

庭燎四声字花云燎力照反初名迩波比庭火也也

いき[illegible]法要[illegible]上千杖はうん

禮記王制

五十杖於家六十杖於鄉七十杖於國八十杖於朝

[illegible]佐川田[illegible]六の[illegible]の山あ[illegible]く

[illegible]哥成実[illegible]感す

[illegible]の山を[illegible]の[illegible]心[illegible]

昌俊姓佐川田字喜六永井播磨守家也後遁世住于
大和國默[illegible]

昌俊

[illegible]あ[illegible]の中[illegible]虎の[illegible]

[illegible]

[illegible]人あ[illegible]て独色球

小学 致知類

程子曰嘗見有談虎傷人者衆莫不聞其間一人神色
独変問其所以乃嘗傷於虎者也夫虎能傷人孰不知
然聞之有懼有不懼者知之有真有不真也

猿啼寒江真に下る三声の哀
いまも実の字老杜のこころなるべし
秋興八首の中 杜甫
夔府孤城落日斜毎依北斗望京華聽猿実下三声淚
奉使虚随八月槎

錦の源もたづねる真の十和田
史記夏本紀
泥行乗橇面乗日橇形如箕樏行泥上

和名鈔
粧粉文迂註云巨女二音和名於古之古米以蜜和米
蔓作也

柏木の脚気の比のつくづくと
源氏若菜下
まめやかに ひとりぬるみつるかな
そこはかとなくあつかひつるかな
和名鈔
脚気一名脚病俗云阿之乃介

うしとたのめぬ仏の誓ひ
武徳編年集成

文祿三甲午七月十五日秀吉の使使福嶋左二門太夫正則
同左馬介直高池田伊与守秀氏高野山に至る秀次の
扈從山本主殿介坊石破万作坊尾州人山田三十郎坊
播州人先達の自害

遠江の浪にさそはれて　別れ

万葉集十
吾屋外に殖生有秋萩子乎誰標刺吾に不所知
千載集
きゝすゝ思ふものゝつゆ草をめしたゝ朱まるの野
和名鈔引本朝式云五月五日競馬立標〻読師米

秋はて女車の影　をとゝ

今昔物語巻九
真道李武士時女車に乗て祭所に行のを載る

なやしや此女車よりいとなまめかしきひとにあつま
るの事あるに男ときゝあひてとかくいひあそぶ

火の風の　はなれ衣を　着給て

竹取物語
中倍大臣火の風のかはをきていまして行姫を伺
給ふとあるに人のふるはしたる
くて焼こうしてうめくとやけうせ姫あるを
いひたる
呉録云日南北景縣有火鼠取毛為布燒之而精名
火浣布　又出搜神記

月のはなちや　乱るる　昇の夏

狭衣物語元の昇の君入内の家に
けるをきゝあはれなるまゝにてうるふとさるる

いまゝゝ中略うちなびけて はるゝと沖のうゝを
又やれて空もたかくうかる白雲をなくて月のさやうすゝゝ
こゝる海のあなたにきゝうゝ四くもの人之

隆辰も人遠の有

拾隆遠小哥のよるみつゝ其文をゆる俤あゝ浪木の
哥世人の口にあ隆遠節ゆゝ投節たゝも云ものと八
日蓮宗の僧なて堺の顕本寺る住せ侍て帰俗て
堂舗高三の家の客ゝうとゝ云
寛文比江戸へ居うゝ

月の梅をさゝあゝんよゝ国いゝ

万葉集三
長皇子遊猟路之時柿本朝臣人麿作歌
久堅乃天歩月乎綱伝刺我大王者蓋尓為有
夫木

高松院左門結

保延三年家成卿哥合
友の和はさゝゝゝすゝ月をうの和ようちゝゝゝる

歌あゝせ 弱古 海 首すゝゝる

井蛙抄
家遠題昭八五月ていさうひみゝう顕昭ハ聖ゝて
独鈷をおゝゝる家遠ハかまゝひ月ていさうひゝう
殿中の女房俗のゝうまゝひと名付ゝ

霸篇 のたゝさ五石をゝす也

莊子
秋穫之成而寅大五石

なゝゝゝも長安いゝと名利の地

白氏文集巻五
閑適

帝都名利場鶏鳴無安居

同　首夏遊開元観

終夜清景前笑歌不知疲長安名利場奥幾人知

このせひきたるふ夕のうてしし

うりふ夏

ひき孫ひてんとそ卧せるまし

源氏　明石

淡路をひきなく

月のうたのうてる清さうに

源氏夕ゝほ

いまもかくやと人のまとひんとのまてあたのめみそう

ちらひこるへてやとの孫ふ女たちちらひて

山のたのもたもとすれ月ふうの空まてかけやるえん

空蟬の離魂乃如のたるしよ

本草綱目人参條下

有人卧則覚身外有身一様無別但不語蓋人卧則魂帰于肝此由肝虚邪襲魂不帰舍病名離魂

夏子益奇疾方云凡人自覚本形作兩人並行並卧不辨真假者離魂病也

花とちしるる草の一枝

拳白集

をなとちしはれたさくらをハつちふむ兒とちるとく

鰻形をうれしさ神年白こんる

大納言公任

うれさを昔ハ神年つくうふよ公任なるまぬ

西王母東方朔も目すれ
手家物語ニ西王母といひし人も昔はありて今なし東方朔と云し
者も名をのみ聞て目にみえず
もろこしへ喫續の妻
喫續濃 在尾張
あらそひし七樽の秋
無名鈔
爲仲任たてまつる時ふやきの秋のころ長樽十二合ヨ
入ておくりたる人あまねく男女集合日八二条
大酒を是あるして人おのおのあつまりて
なもしたまふ立ちうたをきを

秋をてくちをすいるの酒
詩大雅
維秬維秠
書洛誥
以秬鬯二卣傳秬鬯黑黍香酒也
さ泥ちをも正木を引よ誘ふらん
村種 延喜式
紫草 風土記
日本紀 私記云福草
和名鈔云草枝々相値甚々相當也

[illegible]

[illegible]なし　東方朝と写し
[illegible]

[illegible]の夢

[illegible]秋

[illegible]の[illegible]秋のころ[illegible]て長櫃十二合に
[illegible]く写し奥に入る日八二条
[illegible]あり　[illegible]て筆

[illegible]人の酒

[illegible]酒也

[illegible]ふ[illegible]ん

弔按、西毋モ東方朝モ其名ノミニテ形チアリシモノト見エズ
老子道学ナトカ在ラン

標註七部集

猿蓑
炭俵
續猿蓑

下

草稿

猿蓑

ゐゝ部第五　出月録

い

いつくしかたふれふすもせ秋の雨　九丁ノ

入相の梅ヤなり込てひくき竹　十二丁ノ

石山の奥岩間すゝ根ヤ山みなゝ　十六丁ノ

いとすゝ花見入し山のこゝ　十七丁ノ

いつくきて落の葉ヤもるなふくゝろも　十九丁ノ

は

俳諧の集つくるゆ古今ヤてゝゝて云こ　二丁ノ

そつ雪ヤ小ヤ小ヤの星の雨　二丁ノ

たつまヤ何ゝなすゝ舟の中　二丁ノ

遠山よかひゐゐろ下の陰の木　六丁ノ

葉月ヤ夫婦ヤてゝゝる人とゝん　九丁ノ

そつ雄風骨ちゝ立する梅の梅　ヌ丁ノ

夫雨ヤ田ヤ表のしまの鶏　十二丁ノ

妻のみれば小川の堂の跡　十三丁メ
妻八三月曙のおもらをまつらん　十五丁メ
をすき大名高をまつらん　又十丁メ

に　八幡の海棠の流れとまるべきころ　十七丁メ

ほ　ほつれかるる玉の緒のたえなんとする　十三丁メ
ふつつか人形ありこれる新蔵山　十五丁メ

と　多賀の桜人てあるれ余寿の海　三丁メ
寿の面を刷ぬるつくれ　十三丁メ
隊をすて車引　十三丁メ
ときくの家を使てこそ　十八丁メ

ち　ちりのちりあるる人なき夏安二丁メ
千代弾きものを掛こそ　十七丁メ

り　清子ふるる一ものの　又十丁メ

か　彼の面白上人の書て人を作りこそ　一丁メ
る魅空せの御もこまの面　四丁メ
かるる角ふるけよ須弥の山　六丁メ
笠沓いつこ立月のぬるる　六丁メ
髪剃ひ一筋年金塔て五月雨　七丁メ
立ひ山葉朝の夕のうす月　十一丁メ
彼海棠年菓をいとなこそ　十八丁メ

た　年のうのちのうを祖年多とふべきいろ　又十丁メ
立る秋の夕ひ風あ御　十二丁メ
及薩ひ山ひうの代を見ん　十二丁メ
魂呉楚東南ふ　十七丁メ
田子山年古人をのおふ　十七丁メ
唯睡辟山氏と来て辰年を年出　十八丁メ
あらくし年ふ下於ちく五月写　十九丁メ

つ　つの〻あるふ俤の〻くもけや秀　畑　九丁メ
月新和　松すもも　月清　勝の上　十丁メ
　　建れのあるあの上　十丁メ

な　すき人のふ神なんやさ用ふ　九丁メ
狂ふ〻し　毛年明り　神の新　十二丁メ
角素峯　ゝたろし　云こ　十九丁メ

ら　樂天又　脇の神を　ゆうこ　十八丁メ

む　むさんやな甲のすのきくすす　九丁メ

う　うき家をさひ　すよ宋古る　五丁メ
あの者和山陰猫入れ　丈のまの　又十丁メ
う久々者和ふ人黒八牛の角　又十丁メ
和の刻の黄々ふ黄ふ　十五丁メ
浮世のたゝはるなふ小午こ　十四丁メ

の　野を横ゝるりむけよ　叫ける　五丁メ
黄和て右ゝたりの上者の　十二丁メ
黒津の黒たいゝゝ俤ゝ　十七丁メ
空山ゝ乱を打て者ゝゝ　十八丁メ
松死あゝきゝゝ陸の方ハ　十丁メ

ま　雲稽和鶯年方をゝれふゝます　五丁メ
えゝもむ松の赤もあり　五丁メ

ふ　風景依沛入誹城云　十九丁メ
芙蓉のゝゝのゝゝ　十三丁メ

こ　五徒ハりふ年ゝりゝ　一丁メ
この末ゝ和猿のさゝれて　三丁メ
ゝわなんなるの神　七丁メ
この江のあもたゝゝ稲の秋　十丁メ
ゝのまも雁白り男　十三丁メ

國分山とふるのかうあるものをて　十六丁メ
小刀の跡又なる細工たこ　十六丁メ

あ　あるこゝや商麻刈るる藤のあまハ丁メ
あやまりてきこうあさあるる鶴ハ　十丁メ
ある俗の婚ひ——色の都のな　十二丁メ

さ　里入こなたて午の見ぬく　十三丁メ
猿蓑者芭蕉義潤誓之首謂遍　十九丁メ

き　君ら代義ラ　歩らも湯ひとつ　六丁メ
木首の砂蓋ヨ麦もられて　十四丁メ

ゆ　雪ちるも稲毛の其のうのし　四丁メ
り麦を近江の人とをうこれる　十二丁メ

み　勇士英沢氏曲あるる　十六丁メ
身八濤浪自爲平　立ハ
サ高きや並ひうまたる勇ふる　二丁メ

し　きれ人この数ふ風ふ　八丁メ
栗の戸も蕎麦あるまれて耳をよむ　十四丁メ
ふくき祝ふてかされるう　十七丁メ

ひ　庚沢やひとりはるる沢太郎　二丁メ
勝つきやあこまう蕎麦　三丁メ
ひつうけて初雪吹のまこさ　四丁メ
日の道も蕎ふくふくさ月あ　七丁メ
日の暑き盥の庭の嬢のた　八丁メ
日の冠も三うて暑き牛の舌　八丁メ
ひと里こなあなるの孫ふる　十二丁メ
人もこまれ　あこのの　十五丁メ

も　百姓多の暑る四月中の板よ十月　二丁メ
関西ヨ三北をそうひすこ　十八丁メ

せ　猿まうみのあるる　赤松　三丁メ

す

何つのあ旅のこゝろ和も五火産　三十メ

春光人　公ノもあけに庵の雲　四十メ

祈打て菜をつゝんで草枕　十一十メ

吸あてえん出来され　すいせん　十三十メ

すゝきる杉の静なるろう　十五十メ

花ゝすくよる百舌鳥の一声　十六十メ

四季歌　五　冬　十六十メ

炭俵

自筆部第七月録

い　有壱の孫をあわとうこゝ　二十丁メ

いなうき麦を食のかきたのま　二十三十メ

は　なつ午女房の、扶子振舞て　二十丁メ

もの四引ゝて居る　相原　二十三十メ

麦も夜ふ丹沒の庵ゝ　二十三十メ

ほ　初ゝと朝日ふ所の霄の月　三十二十メ

蓮ゝ午ゝ　ゝ伊勢の初侍　三十三十メ

ち　ちゝきの中てゝ出るゝあの　三十一十メ

か　柳ちり一ゝ頃　ゝ仰ゝ　二十四十メ

唐甲やこそて火燵のある所哥

た 井のもやひの遠くきのうくるこそ　二十四丁メ

ち 宋人の亀らんとるを笑をたらん　元こ　二十丁メ
それをよく知てあぎあいのうをと　二十四丁メ

つ 掘ぬきのいぶのかある雪のうく　二十一丁メ
見えの梅は桂の高のもち　二十六丁メ

な なあすきくとる黄の城あひ　二十二丁メ
南哀山を詣て　二十五丁メ

む むのしのふすちのたせて見　二十六丁メ

う うんち果るハるのあきら　二十三丁メ

く くぬき炭のゆる哥をうすし　二十丁メ

や 焼あを紅今る冨田影　二十六丁メ

ま 打ちや矢川（ちるうら鶴　二十一丁メ
舞あの手もまたつの縁　二十三丁メ

け けくしくも見ちをと　二十丁メ
菊なも英繊りをさうり　二十一丁メ

ふ ふもなくれは上ゆす　鶏子机　二十四丁メ
冬ふの孫をけさうるとさかい　二十五丁メ

て てーすなと鶴のかえらす柳門　二十五丁メ

あ あさくもや茸を産すある　二十一丁メ

あるゝ流のうゝの初をゆゑて　三十二丁ノ

き　橋姫よんすひこ入屋た新のうゝ　二十二丁ノ

ゆ　弦打　屋流ゆうる梅　二十二丁ノ

み　箕平　平て宮ゆうそちふくあの松　二十五丁ノ

し　詩の二義ゆうる五月のゆうる　二十丁ノ

ひ　ひとひちすお袋のゆう　二十丁ノ

ゑ　ゑ笹池平蓮ある心ゆうる　二十二丁ノ

す　すいきのもゑあるこつい　二十二丁ノ

すゝゝゝ浮例のうゝのけうゝ　二十四丁ノ

れ撫五蓮ゆ秋のうゝにけき　二十五丁ノ

秋紅ゆうゝ舞のさんひんし　二十五丁ノ

俵猫墓

白ゝ新井ゆゝ出ゆる自録

い　流ゆゝ夫流ゆゝものも見あきを　二十八丁ノ

石蓮ゆ裏門ゆ付てゆすき　二十丁ノ

いゝ不ゆ見いゝ不ゆ北なんゝそ　二十一丁ノ

稲妻ゆ彩のゆゝ流ゆう蔦の徳　二十二丁ノ

は　八九百六十雨降ゆ梅もも　二十七丁ノ

妻静なる竿の浮鑪　二十七丁ノ

ゆゝ妻ゆ年八美萩の白比丘石　二十丁ノ

花鳥の絵面の書物をうる店菓子の類多ふ　三十三丁メ

を　ををを一一　稲坂の枝を多ふかな　三十一丁メ
遅すれて色を　こうふを多ふ　三十三丁メ

か　新年こうるを色の森　二十七丁メ
えをわまく片ちらの梅のも　二十九丁メ
この鶯を枕として海を夢つをこ　三十二丁メ

よ　淀よりも稲田みちなけり　三紀　三十丁メ

た　大内源平あおひて傾とふものをこ　三十一丁メ

れ　前中年七月坂のをの風　二十七丁メ

つ　瓜ちりも砕のまをゆる思ひ分てふるに　二十八丁メ
月のうらをやわる出うるを　三十一丁メ
ら　老杜の性書めのをちう少をこ　三十一丁メ

む　智の書をまつとしサたあるう　二十八丁メ
延道六のうまをすを所ら　二十九丁メ
ずうをきわかる山砂の菓の森　三十二丁メ

う　寄年七月このるを承屋をる　二十八丁メ
寄年橋又する雨ぬきよる　二十九丁メ
うのしをあ野をわつくぬ菓の森　三十三丁メ

く

や　山吹や垣年ひかるを義ひとく　二十八丁メ

ま　宮殿年　宴時の高わ簡　三十丁メ

ふ　寄をちる酒面るあおひて之　二十八丁メ
文書の高ひけて秋すし　二十三丁メ

あ　ぬをちる伊勢の幸　二十七丁メ
ゆるる面のこのすを　二十九丁メ

さ　星霜年　確さくやはるのとも　三十八丁ノ
ちよ　鶴のなきもゆるの　居まるも　三十一丁ノ

き　菜ものひくくみ刈事　俗と云る　三十二丁ノ

ゆ　楪の世阿弥まつらあまかつら　三十九丁ノ

ね　名月やいさ人の　帰ぬ　三十一丁ノ

し　詩ゑらべる衣裳を類例すとこそ　三十九丁ノ
ちう楼や雪のくくて　柳艶　三十丁ノ
葉菜の陰土手陰の　樹を数　三十三丁ノ

ひ　人もとゝあ事や　暁のうぶめ　三十九丁ノ
見とゝ事やひく葉く　の今　鶏の長　三十二丁ノ

せ　鶏清まれて　肌寒をしる　三十七丁ノ

す　松を直ふ棘の木の　絵猫の形　三十八丁ノ

猿蓑標註

隨齋成美校正

俳諧の集つくる事古今にわたりて此道の
ありとて起る時なれば
うぶかの句
年七十よりなりなせるをり父のあるとあぼくやまちうて
ひさしけるを大父のこゝろうあるてあるつきみちうち
れうるのうちあるれくもあらひとんいひる
等白集
大和哥このゆせるまうあるて妻秋の夜ふのう
あるひたをおよはきるあるんちすきひるうち
世ひとあらんまこるる月あるを而あるつき叫をれや

五徳ハいふに及ばず
徳元曰俳諧ハ連哥の外ニ五ツ 備りたる事のしこと
侍るとかや第一俗語を用ゐる第二自縁し侍りても
よろしきる第三ことあはれ興を催する第四初心の
学ひやすくして和哥のうら流れんをよせ侍る
第五ニハ集哥はるの本歴にのたかれとへるまき
興をなし侍らハなるゝことをもりよせて付侍るよし
哥の徒なり

彼是れは上人の骨をもて人を作りて穿ハ小
多る笛を吹けるんなん侍る
撰集鈔
廣澤まて出て骨をあつめてならへて侍 待ハ人の姿

みハ似侍りしかとも色もあしくすこて心もなく侍き聲は
あはれとも弦管のさとしけるも人ハ心ろすりてこれを
ハこの人ハうまもかくしてゝ使のハあれあり聲のあしくきこけれ
けしからすきをしられえふきん しろきゝ笛のさとし

時雨きや並ひゐる鵆ふたつ
同文通考鵆イサ、白小魚名蓋和名鵆斯諧鵆字之誤

廣沢やひとり時雨るゝ沼太良
詩經名物弁解云江東ヒシクヒ一名スヽタラウト呼モノアリ
此亦鴻ナリ但眼上淡白條アルヲ異トス

まつなまおかしれわや北斗の星の前
朗詠集

鴻を沼太良と
唐詩選感遇

五ツ　四ツ　四ツ　四ツ

[illegible]る者才二自然一侍ても

奥を得する才能初心の

[illegible]ら流さんを[illegible]する

歴[illegible]なしたんと一るるまで

[illegible]もりよせて付るるれ

[illegible]て人を作すして[illegible]ハ[illegible]

[illegible]る

侍

[illegible]て作て待ハ人の姿

[illegible]すて仏なく侍き聲は

[illegible]ける人ハ[illegible]なりてこれを

[illegible]れあ聲のあくきはす

[illegible]ん[illegible]節のさと

[illegible]る勢[illegible]

名蓋初名勧斯譜勧字之誤

[illegible]沢右良

[illegible]ヒ一名ヌヲタラウト呼モノアリ

[illegible]係アルヲ異トス

[illegible]の星の[illegible]

鴻を沼太良とよむ[illegible]

唐詩選感遇張九齢孤鴻海上来池潢不敢顧

北斗星前横旅雁南樓月下掛寒衣

ちるあれて何とたまるうろ船の中

軟猿狂言猿引の小唄に曰ちるあさかよるのの舟うとて
もの舟の中に何とあるそなたをたきぬのうちまくら

百舌鳥のなる時中しみ枝よ月（カミナヅキ）

夫本　衣笠内大臣
後のあるあるあるあるの萩も志ゐうふて有るの子に秋そくれゆく

ちるのをあわれとなる人なき夏の女

傳灯録
靈照常製竹灑竹離毒貫以供朝夕居士將入滅復靈照視日及午
以報靈照遷報日蝕居士出五戸觀次靈照遷文座合掌坐亡

猶まつ外る物なし　赤相

増山井
共工氏の子名を共工に共工の疫鬼となりて赤小豆を
お恐れ給ふ故に名を共の日赤小豆粥を食をそなふと
荊楚歳時記にあり　此方にも名を共工とも名をなりぬと終日忌あり
らかしにして赤小豆飯を用ゐるなり
こちらにて多賀の名井のこまさい

旧支記
伊弉諾尊功既至矣德立大矣神功既畢登天報命晋宅於是
少宮復靈運当遷是以構造宮於淡路之洲寂然長隱亦坐
淡海之多賀者矣
神名式
近江国犬上郡多何神社二座

住つゝぬ旅のこゝろ　やまと　火雄

夫木　俊偏　正三位季經

うゝ水せのうゝてなるくゐひるのくすこつゝ鶯ぞあるおもふる

ゆたし　寝入くゐるゝ　余五吾の海

余五吾海ハ近江伊香郡湖水のつゝゝ一里さきのうちー

入くる山ふゝまろのゆくるゝ　ゆくるゝ　ゆくるゝをさして云

この本戸や鶯のさゝれて冬の月

年歌百首　月ゝ

徳大寺左大將　大宮院　今は恵門ハ鶯のちゝれて

そ東の小門ゆくゝ　ゆくゝ　中ゝハ

藤つきゝゝ　こゝゝ　藤つる鶯ゝ

ゆゝゝ　字

宮法師　着原ー　藤ひくるゝ時ひくゝをとまわて　ゆ記

めさゝれゝ　火あきてゝれるゝ　えひさつきをたるへゝ

るゝゝとゝのひるゝたゆゝ　ふゝきゝをゝー　ゆゝゝ

註　藤　着ハ小すゑの緑つきくるあなり

ゝゝゝゝ　藤屋の　藤の刈ゝ

撰集抄

ゝのゝゝのゝゝけゝゝゝのゝゝんほゝくゝのゝゝなり　ゝゝ

信濃野のほゝのすくゝゝ雪ゝゝゝ下葉ハ多の

みゝのゝゝ

藤袋

信濃ハ御山の祭ハ藤のそかゝのをゆるゝを人の

屋をも祭るゝとゝみなすゝきのほゝそゝゝゝ

玉葉集　金判盛久

屋もふくゝるゝのめゝのひとゝもゝふゝゝ里あゝのみさ山

裏老ハ芸藩ヲ去リテ蒼生の為

白氏文集

香炉峯雪捲簾看

ひつてすり　や雪次のてまさ

豊嶋（テシマ）備前郷名

和名鈔

摂津國豊嶋郡

ゆら鮭ゆ　こ雪や　の　鹿も　こ雪の　肉

隠逸傳

空也潛入市而張摩席為居設破盆需食市中無事

一盂自足無復之且眼前衆生界植ミ化業亦能勸我

觀念欲求閑靜先適此處

哭を横ふる引むけよりてきます

拾遺集

あるふつき水井をねと叫る弱ひきもけてたふこ高の松

奥細道

雖代よ馬のてなくらるはは仕のそのこうさくはさ

せよとも為ふきるものなきなるものなを

野を横ふ　芭蕉

松ふ一見の時ふ雪ふ

雪ふ月ふ花ふ

李鴻章ふ雪ふ月ふ花ふ　方をうれほとらた

無名抄

祐盛法師寒夜のふるとふ歌ふちとうもきえうる

のもさうと　ふ雪をよみうふ人をめつらしなと

[illegible]

[illegible]

[illegible]

うき家をはらせよかしとぞ

家集　西行

ふる人もなびくたる山里のはつさくらかな

豊国宮にて

仏のかたちをかりてあらはれ

豊国明神いにしへの方廣寺堂内に五大菩薩をあらはす云

覆醍醐集

題豊国神廟壁　丈山

零落東山古廟廊蒼苔蔓草上頹墻英靈飛散無巫祝秋月春風化主張

黄葉集　之廣卿

豊臣秀吉のたまへるけてあるものとへ

ひとはなをあるちあなたんをれ

[illegible]

天の代山筑摩の鍋一つ

伊勢物語

あるをとこ筑紫の方へまかりけるに[illegible]

筑紫へ行四月の中の日近江国の[illegible]

[illegible]

這出よかしこの山の下みち　蟬の声

万葉集十四

朝霧香火屋之下乃鳴川津之妻比管有常将告兒毛欲得

袖中抄

[illegible]

[illegible]

楽屋火屋をかくる正義なり此国の法

此境をひらくる石をもつて

[illegible]

[illegible]氏あり

[illegible]

[illegible]

奥州名取の郡[illegible]

堀いつくまとゝゝ

笠島やいつこ五月のぬかるみ道

八雲御抄

實方一條左大臣師公孫侍従定時子也母左大臣源雅信公女右中將正四位下陸奥守長德四年十二月

於任國卒

新古今哀傷

一限下ニ

みちのくにてひろきゆゑの塚とて[illegible]

すきなとあひくるをみて

くちもとめて枯野の原にみとゝゝんも

[illegible]

和名鈔

鐵精陶隱居曰一名鐵將水 和名加祢乃佐比

日の道の草[illegible]

枕草子

[illegible]

[illegible]

奉草

其葉傾日不使照其根

つゆみかるかたもなくけふの夏月

嵯峨日記五月十日小けうの登及人とおなじ元禄五年

金毛の[illegible]

ゆうみあふうと

[illegible]

[illegible]

万葉

山上臣憶良罷宴歌

憶良等者今者将罷子将哭其彼母も吾乎将待曽

[illegible]

吉次吉昔之大賈也源牛若下奥州者

源平盛衰記四十二屋嶋合戦条ニ云有國是ヲ聞テ大ニ嘲リ

故左馬頭義朝カ妾九条院雑司常葉カ腹子ト名乗テ

京都ニ安堵仕難カリシカハ金ニ商人カ従者トテ裏笠竹杖背

負ツ陸奥ニ下リシ者ノ事ニヤト云ハヽ

[illegible]

荘子

蟪蛄不知春秋

註ニ云蟪蛄寒蟬也春生夏死夏生秋死不見四時

[illegible]

補曰蟪蛄一名破故紙俗云メクラアサ

日の暑き盛の屋の蠦（ウカ）うち

和名鈔 俗云ウカ
文雅集註云蠦蠖上亡結反下亡孔反
漢語抄云加豆乎先之
日本記私記云蠖未久南岐小虫乱飛礎則天風蓋則天雨

日の暑かこうれて暑き牛の舌

世説
呉牛喘月

ちはやこの葛ぬくまをあつ[illegible]

太平御覽
陸佃云竹六十年一花結実其竹則枯載凱之
竹賦

根幹將枯花獲乃懸符必六十獲亦六年
註竹實日獲

俗云自然獲

[illegible]
きてこの國[illegible]
[illegible]

[illegible]の小袖も今[illegible]

千[illegible]六 寺本の妹

いつくよりたれ[illegible]も秋の来

山家集
いつくよりたれかとそふかちきて左立のつま

加賀の小松と云所多田の神社の宝物[illegible]

むさんやな甲のうらみてきりぎす

太田神社八幡宮より小松の宿より一里半南方の傍なり

葉月や名残の涙人しれん

按葉月忌いとまなきよりもいとまなし

三ヶ月や鰌のあくまで残るこがらし

本草
鱣状似鱘其色灰白其背有骨甲三行鼻長有鬚
口近頷下其尾有岐
業俗云布可養音想字書乾魚腊也蓋字之誤

むら雨の詰もてる淀のかるかと
たなびくのやしろの神垣

取つきてよみしとや

月雪花の上に膳の上

山家集
内にもまうでぬるかたたるこの社のうつくしまるるもせ
孫とてをさしたるる木の宮の月るのくとあるよりも
神さびなるれて あ愛てまるる
叩こまるえてる淀のうくまらうとなるふこ行る

文禄二年つるよ淀
月をうて氣比の明神よ
詩歌上人の詩をきく

月清し遥拝のあるるみの上

気比明神八柔神 仲哀天皇 越前ノ一ノ宮ナリ
古事記
建内宿祢命率皇太子為將禊而経歴淡海及若狭
國之時於高志前之角鹿造假宮而坐
旧事記
二月幸角鹿郡興行宮而居之是謂笥飯宮

あやまりてきこうあきなる鱸ぶ

和漢三才図會
鱸絲異形色似鮎而口濶其尾有小岐有声鮭鳴人捕之
哀声如日五紀五紀又似日岐ミ
和名鈔
崔氏食経鱸音容和名知加布里似鮭而有黒點也

こうらのあのえうぐ稲穂秋

古今集 よみ人しらず
まつこゑ〻ゝ稲穂そよきて秋ぬるかぜ

さかいこゑひかりあのあるぶ
神田多の鶴うつ音 牧足

花すすき大名ぶをまつぶ
神田明神柔神大已貴命相傳人皇四十五代聖武天皇
天平二年庚午鎮坐後延文年間有故合祭平將門霊云

立上る秋の夕やはるるし
和名鈔
病源論云風疹眇人皮膚加佗保路之

春の雪や山路猟人犬吠まる
本朝文粹 神仙谷 都宿称言道
奇犬吠花聲流紅桃之浦

う多の香や多入里ハ牛の角

碧巌
隔牆見角便知其牛

そ[illegible]や[illegible]なき[illegible]梅の[illegible]

壬二集　家隆

[illegible]

子良銀の梅[illegible]

御子良子[illegible]　梅の[illegible]

太神宮参詣記　坂士佛

内宮ニ巫女ハ子良とて幼稚をとめ[illegible]夫婦の[illegible]
神恵[illegible]月事なし　冥鑒[illegible]
[illegible]は則職を辞[illegible]

暗香浮動月黄昏

入相の梅の[illegible]ひきうゑ

杜子美暗香[illegible]

裾折て茅をつ[illegible]草枕

古今集
秋ハ来ぬ[illegible]女房もいふの人ゆ[illegible]なくき
長拾遺
人の[illegible]をゆ[illegible]
次郎百首
[illegible]

みけ[illegible]の[illegible]　紫胡の糸の[illegible]

本草綱目
柴胡二月生苗莖青紫堅硬微有細線葉似竹
葉而稍緊小七月開黄花

夫而ハ田ヵ裏の[illegible]まれ鮒賞

田裏嶋　摂津　今云北濱之地

葛城の神のなを[illegible]

[illegible]ト　あり　[illegible]の神の願

金峯山縁起

役優婆塞金峯山ヲ葛城峯為行通於岡山召集

諸神令渡橋之時金峯大神不勝咒力而且化始之

葛城一言主太神又且始化申於行者云自形尤醜夜間

造云〻

いうの國花垣の庄ハ[illegible]のうち

南ちの八幡の神ハ[illegible]

生ると云傳へ[illegible]

一里ばかり[illegible]の孫ヶ和

沙石集

上東門院無福寺ノ別當ニ仰テ役櫻ヲ召ケレハ塚ヲ車ニ入テ

マヰラセケルヲ大衆名ヲエタル桜ヲ左右ナク奉ラン、僻事

セトテ　おトヽメキ女院キコシメシテ奈良法師ハ心ナキ者

トオモヒタルニワリナキ大衆ナリ真ニ色フカレトテ　サラハ

此桜ヲハ我桜ト名ツケントテ伊賀國余野ト云庄ヲヨセ

テ花垣ノ庄ト号テ墻ヲセラレタリト也

ある僧の[illegible]

玄賞僧都　大僧正を辞する時

江談

[illegible]川[illegible]ハ[illegible]

[illegible]

太田道灌姓源氏字持資淳賴政裔也屬上杉実政公

関西まで[illegible]

[illegible]

扶木砂[illegible]

右

また鮫貢

云北濱之地

ぬきをる

山ら葛城峯為行通於岡山召集

金峯大神不勝兒力而且化始之

又且始化申於行者云自形尤醜夜間

地頭の庄八ろのうち

桜の枝を折ら

信へ大爾れは

の孫和

の苗に仰て役櫻ら召ケレハ塚ヲ車ニ入テ

上名桜ヲ左右ヲ奉ラ、僻事

キコレメレテ奈良法師ハ心ナキ者

大衆ナリ真ニ色フカレトテ サラハ

ニトテ伊賀国余野ト云庄ヲヨセ

ヲセラレタリト也

色の赤すれ

僧正を辞する

よみまて汚れ塵つきたるを志こそ或ハ

志こそと今もいふなり 形頌古キ事也

抜木砂 加茂社百 慈鎮 徒の女ニ

右隨筆雜話より

関西ま

志こそ

の旅

まれ鮎於賣
云北濱之地
ぬれとぞ見る
河神の顔
山ら葛城峯為行通於両山召集
金峯大神不勝咒力而且佗始之
且始佗申於行者云自形尤醜夜間
垣の庭ハそのかミ
桜の糸ま附ら
傳へたる圖れは

の手縁くや
頭嵩ニ御テ般櫻ヲ召ケレハ採テ車ニ入テ
タル桜ヲ左右ナク奉ラレハ僻事
キコシメシテ奈良法師ハ心ナキ者
衆ナリ真ニ色フカシトテ サラハ
ントテ 伊賀国余野ト云庄ヲヨセ
ヲセラレタリト也

手持資源頼政裔也屬上杉実政令

源平盛衰記ニ重衡捕(とら)はれて後小のくにを返しける
条ニ北の方此詞ニおもふ(?)あはれ見之亦へハ今ハ表久亦へ
とて袷ノ小袖ニ白帷具して奉れハ(?)此小袖の袂
つきこらにぬきくみ子とえこ

道真共有勇武名時人呼称之真灌矣文明十八年辛歳
四十二

草庵に石動(かぶる)比い苔の衣

源氏物語
[illegible]

春の雨ふるふる初瀬の堂 彫龍

三代実録貞観十八年記曰
大和国長谷山寺是朝先祖川原寺修行法師位道明
宝亀年中卒其同類奉為国家所建立也
泊瀬山長谷寺本尊十一面観音長二丈六尺仏工楚良文
會誓主勅天平五年五月閏眼

わすれをとるの人をとをるる

[illegible]

[illegible]

きるのみを刷ぬるつ[illegible]

刷今本訓刷以都久呂天宇書云刷也清也除也今訓不穏
可追考
又業刷与殿通殿天迂訓刷以都久呂天

里ふる初る年の夏 ぬく

千載集俳諧部
後拾遺集 赤染衛門
[illegible]

ほつれふる去年の袖さきの ちるる

夫木鈔
加茂社百首 慈鎮
[illegible]
拾遺 [illegible]

芙蓉のたとへのたとへ

本草綱目引郭璞尔雅註曰江東人呼荷花為芙蓉北人以藕為荷時珍釈名云芙蓉敷布容艶之意

吸酒をたんせんすいせん

水前寺在肥後国熊本江津川上三里役寺池中産水苦故以名東西夜話

芙蓉の名は月の海のまそほ人

この春も扇の月の男花なりまて

盧同唐人化茶歌其略曰一碗唯吻潤二碗破孤悶三碗搜枯腸惟有文字五千巻四碗発軽汗平生不平事盡向毛孔散五碗肌骨清六碗通仙霊七碗吃不得也

隣をのりて車引

源氏物語 夕がほ

ゆきをおきまよひ侍ていとふりなるわかなりやとのあはめ又はへわく色をいとかしこ

紅葉にうちあそびとかうゆきをかきわけて手折

紅葉の手わ蕎麦ぬすまれく歌をよむ

古今書簡集

隠逸伝都城のとなりなる家の畠にそなをうえて作りなるを盗ぬすみ人引てとりらるを望てすあるぬすみ人七殿をも見るらんをはをそなてほりさうぬる

法性の果を皆小町となり

玉造小町壮衰書

左臂懸破笠右手提壊笠又曰笠入何物田黒葛花笠入何物野青蕨薇肩破衣懸胸頭壊襄纏脛

子代捨へき物を捨てこそ

家集

ちよつとつきものをしたなすらあつあつたる君のよりひの物ことをとる

本草の脆菜を春のうるみて

下学集 飲食門

蘿 スイウキ

脆菜ハ青菜に酒酢をかけて サワラとねりすり 細長のことく

白みりてねりうるを 酒の上に盛て 喰ふ 木弓稿 青の

おくに嶽山の逸をすする事也 方俗スンキと唱ふ

和名鈔

釈名云 鼓是義反 和名久木五味調和者也

女房詞

酒をすゝめて 着ものをぬくきをて 付たいの女房ことを

こゝろへうくひすのまをてすいくきくふて ニミへんゆに 此ことを

又 世事沙石集 多有

人もこすゝめて あのうふの水

赤潮の水 北越の方云 海を ふを

春のうるみ三月 曙の あけら

枕草紙

春はあけぼのの白うゝ 赤ゆく 山きいすこ なるまて

赤ときく 紫ふて 下され みつ

和名鈔

粢 和名之度岐 祭餅也

三才図会

今云 櫻團子之類 古者祭多用 黍稷 今則以糯米

宇治拾遺

ちゝ ねを せさて 一 ゆきとゝ 穴 中略 紙を こねひぶちて

てゆゝ ゝ れたなるきやうなる を 俗 はさ ゝ ゝ はさ ゝ ゝ もの

さ一ゐてすう

新撰字鏡

稽相与相序二反上祭神米志止文

ふつしんの初てゑる鈴鹿山

山家集

せをのうれていせのくにのたすう山そて

すう山落せをよきたゑすていかゑちり永ゑちも

和の別の無くに無ゑ小あ之

退私録

詩経の云なり　虞人翼俗ゑふ公をのあたかこも翼とうさ

落窪

かいすきてゑるを市ゑれと

すこきる松のえ川ゑちりゑり

花ゑゑ　よる百ゑ花ゑの一ゑ

支木鈔　後京極

すそのに八今こをすゑし小倉山のえけを花のくよる

小刀の蛤丹なる和ユてて

職人尽寄合

弟三刷

いつまゑかゑちゑる小刀のあゑをゑのうをさゑん

幻住庵記

石山の奥岩間のうしろ山を

東菊当年四十七蓋栖此山三年

国分山とゝなうて国分寺の名を得る

続日本紀天平九年詔曰毎国令造釈迦仏像一軀挾侍菩薩二軀兼令写大般若経一部同天平宝字四年天平感宝仁正皇太后光明皇后山用之

天下国分寺本大佐所勧也

按元亨釈書以天平九年詔為国分寺之権輿

雨奉嶽の翠微

介雅

山未及上日翠微凡山遠望之則翠近之則漸微故云翠微

杜詩

華亭入翠微

勇士菅沼氏曲水子

菅沼典膳所家士名外記

塵の海果の流とゝまるへき

子を為る塵の海果のゆくへきてすてとゝまるやみかくれせぬ

山家の浮くもく藻接者に出

いとゝうてをる年入し山のやうて出しとさゝへ

山家集

年の山ゆうて出しとゝ山をもたちゝ矣と人や待らん

魂呉楚東南ゝ

杜律

呉楚東南坼乾坤日夜浮

身清湘洞庭に立つ

山谷

惠崇烟雨歸雁図我潯湘洞庭欲文鴛扁舟帰去故人道是丹青

巣惠善画人

南薰殿にて

唐太宗

人皆若炎熱我愛夏日長薰風自南来殿閣生微涼

田上山の歌

無名抄

式人云たかうの下にうつもれる所みくそこなり　猿丸大夫の

墓おく左方にうもれてなかの巻に出のせられて人々なげかれる

黒津の里はいとゝ秋ふかう紅葉して綱代もん

なうとよめる人あり　紅葉の集の詞

綱代守之歌百葉集無所見可追考

彼海棠の巣をいとなむ主簿あるは菴を

設へる王公の除住の徒あり

徐孝海棠巣上王翁主簿峯菴　梅　葡萄破碧冰雪緑蕚不見

黄相　註云除住樂道隱於樂肆中家有海棠數株結巣

其上時与客巣飲其間王道人參禪四方帰結屋於主簿峯

上當与有毛人至其間問道

唯賸辟山氏と成て屏顔のみを出す

司馬相如大人賦

放散畔驤以屏顔　註屏顔即嶢巖

蘇軾詩

攝衣步屏顔　註山額曰顔

辟匹亦切与僻同偏也

空山の風を打て虚

崔林玉露

孫仲益山居上梁文云衣百結之衲打風自如柱九節之筇送

鴻而太奇語也

とくとくの事を俗云

とくとくと落る岩間の苔清の泊るすみもあきすまるしぶ 西行
按此哥樗良人名然山家集ホ無所見或曰小堀遠州歌之哥也

岡兩の景色をこそ

荘子 岡兩問影

樂天の五脳こ神をやつり老杖疲こ

三体詩 元稹寄樂天詩
差デ逢往景惟惆悵兩地各傷心無限神
小為のわさあ 良基
樂天とゆしく人多ぶをつくせなる為子をくさきて
とおくよりひ人のうさをろしと詩もたとられ作り
宦林玉露
李太白一斗百篇搦筆立成杜子美改罷長吟一字不苟

為従前作詩苦心之一字謗其困瑚鏑也子美寄太白
云何時一尊酒重与細論文細之一辞謗其欠縝密也

先為のも柱此本ゝ為ゝ本ゝ立

序氏あ注 柱ゝ為ゝ
いうちる木のもとをかくるもへ〳〵仏ゝん〳〵もて〳〵いく
人わろけちらあたらはしう〳〵なけさせ柱ゝ仏ゝ偏のミ
をもものうるもあとろ〳〵たこをらひみひとうと見ゆるあと
あゆうてうきをらひうふるをもとけハとちきりきこて
るもあるひ仏ゝ
たちまちんかけ此ゝのみ〳〵柱ゝかもとむなき赤子丸にくぶ〳〵
山家集
なちひるて友をは乗あこからめのねくらにこのむ柱ゝ下枝

風景依稀入誹城

依稀 行得能個也

いにしきて路の苔ふるもの哉

御佛供オブク

あらく——山寺の下苔冬

南史
謝靈運尋山陟嶺必造幽峻登躡常著木屐

跋

猿蓑者芭蕉翁滑稽之首龍也ナリ

龍字冥与卿音同字典云唐堯神人暘有龍在坐勑弓
爲宮在玄中

炭俵標註

隨齋成美校正

宋人の多亀らすとて

莊子
宋人有善爲不亀手之藥者

有壺の滴

宋僧洪覺範石門人文字禪云宋迪作八境絶妙人謂之
無声句演上人戲余曰道人能作有声画乎

けさ〳〵くも鄙ちを

万葉集四　大伴宿祢家持与交遊別哥
盞乞人之中言聞可　乞幾許雖待君之不来盞

詩の石芙我よりへる五川のとる

毛詩正義曰名篇之例義無定準多不過五少總取一或偏舉兩字或全取一句偏舉則或上或下全取則或畫盈或餘亦有捨其篇首撮章中之一言或復都遠見文假外理以定称

くぬき炭のぬる哥をうちす

哲願寺碎醒集

ちたらあかやたるぬ浦山のふしとめて友となるぬる富の埋火　伝話

新六帖　信實朝臣

里人のほるきる冬のふくぬきおろのはなぬるのなかくもり

ほくといひすすお　袋哥

康富記享禄四年正月九日今曉室町殿姫君誕生也御袋大雑兵庫頭妹也云々

そう年ゑ　女房のおやこ振舞て

あやこいすゝて親屬のゑをゆ中國の俗語や

魚好も是　鐵ちう　名付ちう

双の図下

米子家因ちう余松丸を見しておこなひしうまつるるたい

常の産ゑ水ゑゑ米ゑ水くしゑて米ゑゆゑゆゑ水ゑて

ち　後世のあをこちらえてえゑ

あさみや　苣ー　萑　結　きる

和名鈔

鮪尓雅註云渠脂切和名須之鮓也

和漢三才図會云摂州福嶋小鮪鮓

毛吹草

萑鮓江鮓也腹に飯入るる萑のこをくふくるを以てあ

ゑこと　鮨　日ろろのすゑ　茶月

源氏後のうら業

卯月の始日はあまの麻の衣 中略 月はさらにおもしろと花の色はさらなる人あはとあるを

案六日七日のころまでをふくしー

捆 めきのいぶ若葉なる雪のうへ

ツナヌキハ雪中ニ用ル皆之菓子製ス 今年そうう雪皆と唱ふもの

ぢくめきの中てもよりはするりはあくの

チヽメキハ鷹の翎ようふを入て指置ふ件の名目也

松坂の矢川へそゝぐうら通り

許六南行記

松坂の矢川と云人の西ふかるを思さ知有るそへハ

そハ孫てゝ矢の不ほなりたりとうふ

巣ハ詞よりてゝそハ其所迄女あけまを矢へー

迫江海のうら岩洞を伝て

李白湖水賦

国中古に反けおく水り泥ちー音声ゑ清閑をうちて

うらの云葉をゆるふ

辞典の多もゝ人つるる縄

東雅

反轉ゝん(キ 糸器をカセワクるいひ二ヒハとるいふこ方言の用

うらあるのゝれをるや帰今古國の支ふいゝん(キと云こ糸を

くてへあるものゝ糸ハゝん(キとふるわ古語ニ器具の類をハ

ケとゝひゝと云しや

和名鈔

反轉弁色立成云 久流 用 枳

漢語鈔説同

すいきの花さんあやまるこつてい

和名鈔弁色立成云特徒得反俗語古度比

弦打　弦　海　弦　桶

弦打ちしなの異名なり異説のあるあつて弓弦を

打振さいく音あるをいふ

機婦能　のいこ　庭に　紀このり

機織りすて二度の休とふみ二ツ休多ケ休フナノ体也

婦人のこたえこハまやさ多ケ起るとふ

なあすゝ　大　とる　蕃の　塀　あらひ

なあすき巻懐食鏡に啓益曰卜治茸に似て豆長し

筑紫にテハ水タ、キト云味甘美也

花の内引　縅　て　有　樫　原

樫原在大和芳野に近し

うんち　果　る　八　る　の　こ

契中白うんてもうんてもこの屈の字の音を和訓云

ちいうるこう

蓮　華　ゆ　伊　場　の　初　作

夫木鈔

はるかにせる志人あとふかてたるを流のうしの面

慈鎮

華　狩　丹　波　の　鹿　も　ゆ　て

平家物語

初さゆるの雲に鹿かよのうち鹿ハうよしれ世冒こり暖みあ

よ一ハ茶の湯なり みんとてなりまし庵ハ丹波へ越世写く子
宗くなりしハ雪なりとて丹波の庵なりまいらせへ越ら

いろのしきまえを蓬のかきたのまま

袋草紙
田舎装束のままにて柿の小太り女衣をおりて懸肩

鰥寡孤池に　蓮ある　心かな

とくく●白合に　蓮あるあくひかと有

万葉集十六　献新田部親王歌
勝間田之池者我知蓮無然言君之鬚無如之
右或有人聞之曰新田部親王出遊于堵裡御見勝間田之池感緒御心之中還自彼池不忍憐愛於時語婦人曰今日遊行見勝間田池水影濤々蓮花灼々可憐断腸不可得言乃婦人作此戯歌専輙吟詠也
又袋草紙に此歌の事が見ユ

柿ちるし　秀種い中しや継どり

美濃南見郡立政寺領十五石俗称柿寺
関ヶ原御陣の時此寺にて　神祖に柿を奉るとて大がき
御手に入りしと祝しなる御朱印を賜ふとぞ

みもなくれよもなし　粽五把

ちまき五把まゐらすとてよめるを　貞徳
ちかき山路からぬ住居さいあうにとひハせ侍るすくさる
遠し
ちよまでも帰さらぬならできくべきハホのあとつれ〳〵たつあらん　長嘯子

すしさいに深渕のうへのはこぶへ

孟子
魯人猟較孔子亦猟較　註張氏以為猟而較所獲之多少也

牛蒡子　和名恵美佐久佐

源氏物語　接笛

ちなみたひ出るよくいなとてたゝらをはとゝ泊りもちて
えつらもよとゝひめし路（こいと申けるこゝの
なをて同り花子ゆ申ふらん牛蒡のこゝ申てゝ
ものゝ名あり

えびをよく知てあるきあいもりなと

大和本草

阿波国ハ焼酒ニ雞子砂糖ナト入テ料理ニテ用ユト云ク

てゝ〜ゝ与と　新古今集

古今集

柳々香を比くらの花ゆ見ねせて柳かなるちらせてゝ

蓴菜　干して宮ゆとゝ

和漢三才図会　類聚名合　實白縄　猪俗名花乃止知

蓴菜本綱の實柳の子と
えまさるゝ實のまゝゝて干せい路をえミ出て路をゝ
路の柳といふなり

取いまゝ

赤撲　元名如意草

秋のうにゝ

古今

思ふゝゝり出るあるる　思ハ出ら路たゝまくをきあるゝ

冬枯の磯に今朝見るとびからす

和名鈔

楊氏漢語抄云鷄冠菜 度佐加能利

延喜民部式交易雜物伊勢國ノ下ニ 鳥坂苔五斤

南宮山に詣て

南宮山在美濃國

庚申やこゝに火燵のある宿を

三體詩

年長當推甲子夜寒初共守庚申

鮭網に鮭のさかれはひく九へ

鮭をとるは川中に竹を立てあさせをこしらへるをトメといふ其側に網をたくり鮭をよせて奥のはうに入たるを網之

貫之の梅津桂のもみち

大井河行幸序 紀貫之

あはれわか君の御代なか月のこゝぬかときのふいひてのこれる菊見給はんまたくれぬへき秋ををしみ給はんとて月の桂のこなた春の梅津より御ふねよそひて

むかしのみありゑのくせて土

宇治拾遺

貫之か土佐守になりて下りてありける任はての年七八はかりの子のえもいはすをかしけなるをかきりなくかなしうしけるかとかくわつらひてうせにけれはなきまとひて病つくはかり思ひこかるゝ中に柱にかきつけける

都へと思ふにつけてかなしきはかへらぬ人のあれはなりけり

とかきつけたりける歌なん今まてありける

燒毎り紙合る冨田彩

冨田左伊勢産鰹

續猿蓑標註

隨齋成美校正

八九月ごろ雨降る柳のち

叢笹低地碧高柳半天土月

狗脊ゆゑ肌こくなる

和漢三才図會

狗脊俗云世年未以生深山中春月生芽如蕨而一莖無

極莖末卷葉似握拳狀

削ぶくに毛刀坂の名の

長刀坂岸山家の麓より大沢と唐沢のあはひにあり

ゆきつる伊勢の辛洲の岩に鶴り

辛洲ハ松坂矢川より行程之

妻婦ちる麻の染纑（カヒ）

纑説文布縷也孟子妻辟纑趙岐註練其麻曰纑

露りこふる玉笹の露

源氏手習

あらぬあちぬ色き萩の下葉ひろちてきくへなんとみゆる色々の
うへれあられちるのえんにあへりたるすゝきくし比のこゝちく
をりくあふきさらなめ

砂を遊ふ蘇の中の絡（ギ）緯（ス）の声

莎雞絡緯共ニオナシ今ノ俗キリキリストト云者是ナリ
其声ノキリストト云カ如シ但キストハ方言也

鶯のまて日もりもせんるま梅語

字彙蛩思註切音呑聲与蛩同
風俗通怪神女新従蛩家来

富貴なる酒屋にあそひて文君か
爪なるゝ酔のまきれに思ひそめてしるに

漢書
卓文君蜀郡臨卬富人卓王孫女新寡好音司馬相如与
客至其家酒酣鼓琴而以琴心挑之

里坊の雄さくやむ名の花

里坊八廣山の後ろの里にある坊をふ
日之淮皇后も山科は里坊とふみる

蕚の花もちらすかぜを大七カ小さふと呼ぶ

蕚ちる咲原ふもの思ひあさく

凡有刺者皆曰茨俗呼長春日波留維

山吹や垣の干くる蓑一重

後拾遺
みのる人の仰ぐ水山吹のうつろひをとをてとせて待りける
ゐ心もうつろひすぎにけるかなあはせりるとて
なき屋にもさかりも吹のみのひとつたにちきはなやしきく

茨道八角のうすもの之所八

茨道八茨の茨を鋪て人をのぞす之枕草紙を外
古加流ゐ

詩るゆる衣裳を襲倒すをを文の矢ゆ弦

詩経奔風
東方未明顛倒衣裳顛之倒之自公召之

人も見ぬ寒の陸のうちの梅

後拾遺集
みちぬみハうやうるすす陸うちるの梅をのうてちく
一説ニ京ノ外記字曲翠者故家滅其妻為尼号破鏡後
流落住泉南堺津好謡琴翁遍至其家作鏡之裏之句云

[illegible]まあの君
俗こゆすみを称して妖り君とよぶ

[illegible]の世阿弥[illegible]
葉世阿弥叅五月十五日也出歳且部不審

[illegible]に橘[illegible]の[illegible]
和名鈔
唐匀云翡翠也章炬反字亦作翡
文選射雉賦云軒翡波布流

[illegible]の梅の花
一万葉集巻九
見菟原處女墓作歌
八年兒[illegible]之元生乃時從小放尓髮多久麻庭尓之

[illegible]の白比丘尼
[illegible]狐の[illegible]八百比丘尼
[illegible]
又按此七生の尼を白比丘尼とよびなすいせ[illegible]
勢州関の九関山地蔵院の宝殿に白比丘尼真筆の額と
云ものあり
康富記宝徳元年五月日録曰若狭白比丘尼上洛与東國
比丘尼偶會相語云
國史實録曰康富記五月頃俗説称白比丘尼善談古来事
殊請源平合戦之始末又称面見義経假修驗者之形遇北陸道云

[illegible]
[illegible]

[illegible]あの君
[illegible]
[illegible]
[illegible]殷旦部不審
いれの迎ゑや
[illegible]
[illegible]子亦作者歟
[illegible]梅の花
麻庭尓之

[illegible]の白比丘尼
[illegible]
[illegible]
[illegible]尼真筆の額と
若狭白比丘尼上洛与東國
[illegible]説称白比丘尼善談古来事
義経假修験者之形遇北陸道云
[illegible]子規
[illegible]のうりのまゝ夜ふるに

李白と許六が撰し篇穴太に
[illegible]あと祈てほめうと賦してるいえ[illegible]の曙
草をとよめあと祈てほめうと賦してとりてるいえ[illegible]の曙
なくてハあるまゝ　狩ぬとゝ布袋[illegible]寿も[illegible]
あきらゝ[illegible]傷ゝ[illegible]初恋のあ[illegible]
[illegible]あきひなゝ[illegible]男ゝ[illegible]
宋旦
[illegible]　[illegible]　其角
[illegible]代[illegible]狩ぬとゝ[illegible]
[illegible]　許六

石ばしや裏門のて夕涼を

本草綱目
石斑魚生南方溪間水石處數寸白鱗黑斑浮水面聞人
音則劃然深入
大木鈔　仲正
あれうちてなるのあきせてすふ(き)淵もとめる石ふの水を

たう燒ふ麦かうを屋て　柳龍

川狩ふ多ふ獲を多ちに串ふさして燒食ふを俗鹿燒と云
和名鈔
引漢語抄之鮠波江又用鱆字所出未詳魚似鮎白色也
晉書李傳
夏月虛閑高臥北窓下清風颯至自謂羲皇人

西行

新古今
月をまち

かつれの是ゝつれの非なんと侍り
ゝは名のみつゝ月をまち

老杜の唱ゝ吉ゝのこゝろ
仰文韻府
稻穫空雲水川平對石門　杜子美

月かゝるゝ山ゝ
雲ゝ
古今抄名　うゆゝの宮
秋ゝと月の桂のみやゝ

名月や四五人寄て船遊び

和名鈔
舳訳名云艇薄而長者曰舳當蓋切与帯同今案和名
比良太

をゝたゝ人一人橋板の杖ゝ為れなる

俊頼抄
敏中國鶴坂大明神祭の日觀眼木のたゝと云女の
男一たる義ゴをゝうて世を去なる

はちよ姫のなきまゝ床に花

はまゝを九州の俚諺ゴ曰仏もをゝ
集ふ文庫ゴ上也なをゝうゝと云ま
大海の底ゴあそひて橋
ふるの孫ゴ遊ひゝる

但史邦が自
ゝうゝなる
法氏物語ゴ
橋ゴ方言ゴ
ゴ云 西
其事ゴきゝ
ゝうゝのゝ

橋次八武州の隅田ゴ行はるゝ倫名の酒飲なり
詳ゴ水鳥記ゴ見る

ゝうゝきゝ山の草の新

和名鈔
行縢訳名云の音騰和名
无加波岐 騰也言最脚可以跳騰軽便也

むの髑髏を枕ゝして孫ゴ夢ゝうゝを

ゝうゝさゝも
荘子至樂篇
桜髑髏枕而卧夜半髑髏見夢曰子之談者似辯士諸子
所謂皆生人之累也

稲つゝ穂ゝゝの小ゝゝうゝ穂の穂

袋草紙

すし艜ぬ称
者日艜當蓋切与帯同今案和名
彼のおにゐうれな
小奈の日龍眼木のちすと云て女の
らて女を并なま
も麻し法ま𛂞花
読に風仙花をとふ
玉うろと云ま
して杼次と
ゆ

士は子信まて蕌名の酒飲なり
九由
山路の草木の露
和名
岐
騰也言畏脚可以跳騰輕便也
として路に夢うつゝと
羊髑髏見夢曰子之談者似辯士諸子
ふこころの花の種

法ま𛂞花ハ鳳仙花をとふ九州の方言なり
但史邦が自撰の小文庫ハ
玉うつゝなまりもゆのしつま𛂞花とあり
源氏物語玉葛の君ハ豊後にてひとゝなれた
るの方言の訛もゆのしといへり 松浦佐用姫
なりとも 西方の言葉にてあはせたまふにハあるべけれども
其事古きよしてをりしふれ史邦が小文庫の
玉うつゝのうちを用ふべきなり

秋ぼのうちふくことたゆあくをのといてゝ[illegible]あひけり
人夢に目ゐり薄オヒタル人アリ祢小野此哥ヲ詠ス夢サメ
テ尋見ニ一ノ觸髏目ヨリスヽキオヒ出タリ取其觸髏テ
閑處ニ置云ニ此知小野尼云ニ

ゆめとうつつか一葉くのたゝ[illegible]のあ

石葬註見曠野集

菊花ひらく竹列亭屋とりてたゝまり
川辰重陽の為ゝ[illegible]なるまゝ

蘇軾集

嶺南気候不常余堂謂菊花開時即重陽
本朝文粹
停九日宴十月行詔 後江相公
宣開良燕於十月之首以說余芳於五美之襲凡儀式

一准重陽云ニ　天暦四年九月廿六日

菜菜の為土芳琴の琴を弱てを

晉書曰
陶潛字淵明柴桑人性不解音畜素琴一張絃徴不具
毎明酒之會則撫而和之曰但識琴中趣何勞弦上声

うるをあ琴中仰ゝあ菊の友

古謠曰膠柱鼓瑟

花蕊ゝ趙南の古居残りへる

山家集の題よ

山家集
花蕊ゝちゆうなんの古ゐて
捨ゝて命をあるる人ゝなちのこゝをとゝへる

范蠡事實詳見史記貨殖傳

遊けて亀みこうふ千年うも中

和名鈔

陸詞日電角角切和名阿良礼雨冰也

文亀の扇ぎ出け秋涼

西行上人談抄

硯箱のうさぎふたのうらてもとりのいろ変てくふ

みて夜のもうあまう年あく必ずもあるなおかるう和哥

の今の文亀い式とふいふ歌うをなる哥扇うやうのものを

ものひき